

渡邊 敏 没後90年

令和2年度 市立大町山岳博物館 企画展



# 博物学と登山

— 大正登山ブームと  
信州理科教育のさきがけ —

RELATIONSHIP BETWEEN NATURAL HISTORY AND MOUNTAINEERING  
2020 EXHIBITION OF OMACHI ALPINE MUSEUM



渡邊 敏 没後90年

令和2年度 市立大町山岳博物館 企画展

# 博物学と登山

## — 大正登山ブームと信州理科教育のさきがけ —

会 期 2020(令和2)年7月18日(土)～9月27日(日)

※会期中、7・8月は無休。9月7日(月)・14日(月)・23日(水)は月曜または祝日の翌日のため休館

開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

会 場 市立大町山岳博物館 特別展示室

観 覧 料 大人450円 高校生350円 小・中学生200円

※常設展と共通、30名様以上の団体は各50円割引。そのほかの各種割引については窓口でお問い合わせください。

主 催 市立大町山岳博物館

**企画展関連の催し** ※下記の催しについては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況によって中止を含めて予定変更の可能性があります。

### ミュージアムガイド

期 日 7月19日(日) 8月10日(月・祝) ※山の日 9月26日(土)

時 間 各日とも1回目…午前10時30分～ 2回目…午後2時30分～

会 場 市立大町山岳博物館 特別展示室(企画展会場)

### フィールドワーク「白馬大池登山－博物学ゆかりの現地探訪－」

期 日 7月28日(火)・29日(水) ※1泊2日

場 所 樽池～白馬大池周辺 往復(白馬大池山荘 宿泊)

協 力 長野県山岳総合センター・大町山岳博物館友の会

### ワークショップ「一壘百験－山のミニ科学実験教室－」 ※「さんぱくこども夏期だいがく」として実施

期 日 8月1日(土)

時 間 午前9時30分～正午

会 場 市立大町山岳博物館 講堂

協 力 大町エネルギー博物館

### さんぱくゼミナール「信州の教育者・地質学者 保科百助－明治期を駆け抜けた唯一無二の奇才 五無齋にせまる－」

期 日 9月20日(日)

時 間 午後1時30分～午後3時

会 場 市立大町山岳博物館 講堂

講 師 村田長年さん(五無齋保科百助研究会)

表紙写真：《上部左端から右回りに》渡邊敏記念碑、渡邊敏肖像【大町市立大町西小学校蔵】、ライチョウ剥製【大町市立美麻小中学校蔵】、志村寛採集の植物腊葉標本【当館蔵】、田中阿歌磨による白馬大池での湖沼調査風景 1920(大正9)年【当館蔵】、《中央》窪田畔夫筆『郡治日録』1883(明治16)年 写し【一般社団法人北安曇教育会蔵】

裏表紙写真：白馬大池



# 目 次

	頁
開催にあたって	3
山岳文化都市宣言／信州 山の日／山の日	4
展示解説	
第1章 博物学と登山	5
第2章 大正登山ブーム－近代登山の隆盛－	6
第3章 信州理科教育のさきがけ－博物学の士々群像－	7
渡邊 敏	7
《コラム》長野県の学校登山の現状	10
田中阿歌磨	11
河野齡蔵	13
《コラム》活躍する先生たち－国語読本の「白馬岳」と松岡邦松、高山館と馬場治三郎－	14
矢澤米三郎	15
《コラム》博物館や学校が所蔵する標本の価値	16
保科百助(五無斎)	17
志村 寛(烏嶺)	19
第4章 山の博物誌－過去・現在・未来へ－	21
北アルプス後立山フィールドガイド－白馬大池周辺の博物誌－	22
《コラム》北アルプスは世界屈指の豪雪地	23
《コラム》白馬大池火山の地形・地質	23
《コラム》白馬連山高山植物帯	24
《コラム》小蓮華山付近に生きるライチョウ	24
《コラム》白馬大池のクロサンショウウオ	25
《コラム》山小屋物語－北ア最初の近代登山者向け営業小屋・白馬頂上小屋を開設した松沢貞逸－	25
《コラム》雪形伝承と山名考－小蓮華山の「コウマ」と白馬岳の「シロカキウマ」－	26
展示資料図版	27
展示資料目録	32
博物学と登山 関係略年表	33
主要参考文献	35

## 凡 例

- 1 本書は、渡邊敏没後90年に際し、2020(令和2)年7月18日から9月27日まで市立大町山岳博物館において開催する「博物学と登山－大正登山ブームと信州理科教育のさきがけ－」の展示解説書である。
- 2 写真や図表等の図版に付した番号は、展示パネルや展示資料のキャプションプレートの番号と共通するが、必ずしも実際の展示順序を示すものではない。なお、原資料所蔵者や写真提供者等の明記がない写真や図表等の図版は全て当館撮影あるいは所蔵・作成による。
- 3 資料名称は原則として所蔵先の呼称によるが、一部統一を図るため変更した。
- 4 会期中、企画展の内容については、展示替えを一部行う場合がある。
- 5 企画展の企画および本書の編集は同館学芸員・関悟志が担当した。また、本書の執筆は関のほか、同館館長・鈴木啓助、専門員・太田勝一、学芸員・千葉悟志、栗林勇太、藤田達也、長野県山岳総合センター所長・傘木靖氏が担当した。

# 開催にあたって

明治維新以降、政府はそれまでの読み書き中心の学習ではなく、野外学習や科学実験などの実践的な教育を取り入れた新しい学習を全国で展開させました。明治・大正期、そうした教育を修めた信州の教師たちの中に、動物・植物や岩石・鉱物などといった、このころから盛んになりはじめた博物学の分野において、北アルプスなどの高山に自然科学のフィールドを積極的に求め、学術登山を实践する人びとが現れます。当時、国内の登山黎明期にあつて、そうした博物学に通じた長野県内の教師たちが自ら生徒たちを引率して、授業での遠足や学校集団登山で北アルプスなどへ登ったことは、「大正登山ブーム」といわれる大正期以降の近代登山隆盛のひとつの要因を成したと考えられます。

なかでも、福島県出身の旧二本松藩士・渡邊敏は明治・大正期に教諭や校長として大町市をはじめとする長野県内の学校に勤め、信州における近代教育の源流を形成した教育者のひとりです。とりわけ、日本登山史において特筆すべきは、国内の近代登山のさきがけのひとつとして明治10年代に白馬岳登山を行ったことと、明治30年代以降、その教育上の有用性をいち早く説いて学校集団登山を信州の山岳で実践したことです。国内の近代登山黎明期にあつて、これらは注目に値します。さらに、信州理科教育の発展を担った河野齡蔵や矢澤米三郎、保科百助(五無齋)、志村寛(烏嶺)らといった植物・動物や岩石・鉱物などの博物学に通じた長野県内の教諭の士々たちが、信州の山岳をフィールドとした学術登山や生徒を引率しての学校集団登山を率先して行いました。現在までに、長野県内の中学校などで学校集団登山が広く行われてきている背景には、明治・大正期の教育者たちの活動があつたことは見過ごせません。本展を通して、こうした登山が持つ日本登山史上の意義を再度見つめ直したいと考えます。

本展では、大正登山ブームや信州理科教育のさきがけともなつた明治・大正・昭和初期における博物学と登山のかかわりについて紹介し、博物学に通じた長野県内の教諭の士々が残したゆかりの品々約30点を展示します。

結びに、本展にあたり、多大なご協力と貴重なご教示を賜りました皆様方に、心より深く感謝申し上げます。

2020(令和2)年7月18日

市立大町山岳博物館  
館長 鈴木 啓助

## 「山岳文化都市宣言」

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人が共生する独自の山岳文化を形成してきました。

私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

21世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館開館50周年の節目にあたり、山岳博物館創設当時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人が共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

2002(平成14)年3月15日

大町市

## 「信州山の日」 7月第4日曜日 ※2020(令和2)年は7月26日

長野県は、県土の約8割を森林が占める全国有数の森林県です。この森林を水源とする豊富な水は、本県はもとより下流域の都市部へもその恩恵をもたらしています。また、全国に23座ある3,000m峰のうち15座を有する日本一の山岳と固有の生き物たちの宝庫である高原には、県内外から毎年70万人を超える人たちが訪れるなど、山が与えてくれる様々な「恵み」は私たちの生活になくてはならない貴重な財産です。

長野県民共通の財産であり、貴重な資源である「山」に感謝し、「山の恵み」を将来にわたり持続的に享受していくため、県では長野県独自の「山の日」を制定します。

2014(平成26)年

長野県

## 「山の日」— 山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する — 8月11日 ※2020(令和2)年は8月10日

国民の祝日に関する法律の一部を改正する法律(平成26年法律第43号)が2014(平成26)年5月30日に公布され、「国民の祝日」として新たに「山の日」が設けられることになりました。

2016(平成28)年1月1日 施行

内閣府





# 博物学と登山

明治維新以降、政府はそれまでの読み書き中心の学習ではなく、野外学習や科学実験などの実践的な教育を取り入れた新しい学習を全国で展開させました。そうした教育を修めた明治・大正期の信州の教師たちの中に、動物・植物や岩石・鉱物などを対象に自然科学の調査研究を行う博物学の分野において、北アルプスなどの高山に自然科学の未知なるフィールドを積極的に求め、学術登山を実践する人びとが現れます。こうした近代的な博物学が普及する以前、国内では、山野で採取した自然の産物を薬用に活かすための本草学が展開されてきました。

## 本草学

本草学とは、古代中国において体系付けられた実学で、山野にあまたある自然物を弁別して薬効を明らかにする学問です。日本では奈良時代の伝来以降、江戸時代に最も盛んとなり、さらに西洋由来の博物学的な要素も加わって、本草家と呼ばれる研究者や同好者たちによって国内で独自の展開を見せました。

## 博物学

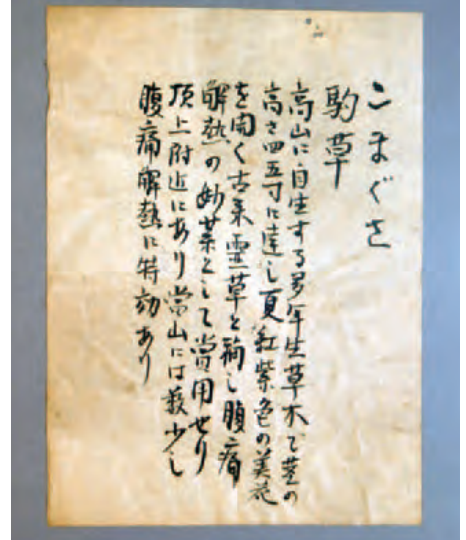
博物学とは、動物・植物や岩石・鉱物などの自然物について記載・分類、分析・体系化などを行った総合的な学問分野です。これから独立して生まれた現在の学問分野である生物学や植物学、地質学などが成立する以前の呼称で、明治期において英語の Natural History の訳語のひとつに用いられたものでした。

## 学術登山

明治維新以降、一部のいわゆるお雇い（お抱え）外国人や外交関係者などの外国人たちが盛んに日本の高山を歩きました。明治維新後、政府は西洋文明の導入によって近代化を進めます。科学技術を外国から取り入れるため、鉄道・電信・造幣など各分野にわたり、諸外国から優秀な人材を招聘しました。また、外国の各政府から日本へ派遣された外交官や地質・地理・動物・植物などの調査を行う科学者のほか、布教活動のために来日する宣教師などがいました。こうした外国人のなかに、趣味あるいは調査研究を目的に日本で登山を行った人びとがいたのでした。

さらに、1894（明治27）年に刊行された志賀重昂の『日本風景論』などの書物に影響を受け、日本人の間でも、山岳美や登山の素晴らしさにひかれる人びとが現れます。また、1900（明治33）年に学生を中心とした「日本博物学会（のちに日本博物学同志会）」が結成されるなど、このころから本格的に盛んになりはじめた博物学の分野で、高山に自然科学のフィールドを積極的に求める者たちが現れます。こうした一部青年たちの集まりから発展し、1905（明治38）年に東洋における最初の山岳団体として「山岳会（後に日本山岳会）」が結成されました。

このような国内全体の流れの一方、北アルプス山麓の信州では博物学を修めた教育者を中心に学術登山による登山熱が高まりをみせたことは、日本の山岳文化史を語る上で見過ごせません。



上：高山植物 コマクサ

下：薬草の説明書き「こまぐさ」

【原資料所蔵：小谷宗司氏】

昭和30年代頃までコマクサは“霊草”として木曾の御嶽山を中心とした御嶽信仰には欠かせない植物でした。御嶽山の登山口、木曾郡王滝村で代々続く薬草店では乾燥したコマクサの全草が昭和30年代まで単品で販売されていました。店頭にはガラス板製の蓋付き木製小箱を傾斜台に6つ並べた陳列棚があり、小箱にはコマクサのほか、カイバクソウ（イワツメクサ）、オンタケニンジン（シジウド）、オニクなどが収められていました。

木曾地域では、江戸後期頃から薬草・薬種の特産化を図る産業開発が進められていました。



# 大正登山ブーム — 近代登山の隆盛 —

大正時代になると、信仰や仕事ではなく、自由な意思と行動にもとづいて登ること自体を楽しみ価値を見出す登山、いわゆる近代登山が国内で隆盛となります。鉄道を中心とした交通機関の発達や地形図の発行、山小屋の開業などが影響し合い、登山を取り巻く環境が整備されたことで、北アルプスでは夏山登山者が急増し、いわゆる大正登山ブームを迎えます。

## 交通機関の発達 — 鉄道の整備 —

大正初期、大町地域周辺にも鉄道がつくられ、汽車が走るようになり、交通の様子が大きく変わりました。1915(大正4)年に北松本・豊科間で開業した「信濃鉄道」は、北へ北へと線路をのび、翌1916(大正5)年には、大町まで開通しました。この地域初の鉄道は、地元住民はもちろん、遠方から北アルプスへやってくる登山者など、多くの人びとに歓迎されました。



鉄道の汽車 木崎湖付近

【写真提供：大町市文化財センター(複写保管)】

## 地形図の発行

数十年間の測量と製図作業をへて、1913(大正2)年から陸地測量部の北アルプス部分の5万分の1地形図が順次発売されました。それまでの地形図は同じ山でも地域によって呼び名が違ったり、山の並び順も定かでなかったりしました。大正初めに誕生した精度の高い地形図は安全な登山に大きな役割を果たし、大正年代に山登りが盛んになる要因のひとつはこうした地形図の発行にもありました。

三角測量の檣<sup>やぐら</sup> 白馬岳山頂

## 山小屋の開業

北アルプスでは、明治末・大正期から近代登山者向けの営業小屋が建てられて開業するようになりました。大正に入り、登山愛好者の増加につれて山小屋の建設も進められたことで、登山者の数はさらに増えていきました。こうした山小屋によって登山がより快適になるとともに、安全面で大きな役割を果たすこととなります。大正前期はまさに山小屋建設ラッシュの時代となり、北アルプスの主要な山岳や要所には次々と山小屋が建てられていきました。山小屋の建設とともに登山道の整備も進みました。



白馬頂上小屋(後の白馬山荘)

明治末期 【写真提供：松沢貞一氏】

## 学校集団登山の実践

明治・大正初期、信州の教師たちの中に、当時盛んになりはじめた博物学の分野において、北アルプスなどの高山に自然科学のフィールドを求め、学術登山を行う人びとが現れました。同時に、博物学に通じた教師たちが自ら生徒を引率して、授業での遠足や学校集団登山を実践したことは、大正期以降の近代登山隆盛のひとつの要因となったとも考えられます。



大町小学校登山隊 白馬岳登山記念

1919(大正8)年

【原資料所蔵：大町市立大町西小学校】

# 信州理科教育のさきがけ

## — 博物学の士々群像 —

1883 (明治16) 年に近代登山者として初めて白馬岳に登った渡邊敏は、近代教育を修めた教師でした。渡邊ら一行の白馬岳登山は近代登山黎明期における最初期のものでしたが、当時は一般に広く知られることはありませんでした。その後、1898 (明治31) 年、高山植物採集を目的とした白馬岳登山を河野齡蔵ら信州山麓の教師3人が行い、その様子を書物で発表すると白馬岳は全国的に一躍有名になりました。河野らは1902 (明治35) 年に「信濃博物学会」を結成。同会は1919 (大正8) 年設立の「信濃山岳会」の母体のひとつとなります。同時に、こうした博物学に通じた信州の教師たちが生徒たちを引率し、授業での遠足や学校集団登山で北アルプスなど信州各地の山々へ学校行事として積極的に登りました。

明治・大正期における信州の教育者を中心にした近代登山をめぐる一連の動きは、大正期に国内で登山ブームを巻き起こすことになるもうひとつの大きな流れとなったといえます。

ここでは、北アルプスに自然科学のフィールドを求めて学術登山を实践し、信州理科教育のさきがけともなった明治・大正・昭和初期における博物学の士々を紹介します。

### 渡邊 敏 WATANABE Hayashi (Bin/Satoshi)

1847 (弘化4) ~ 1930 (昭和5) 年

#### 信州近代教育の源流を形成した教育者



渡邊敏肖像

【原資料所蔵：大町市立大町西小学校】

福島県出身の旧二本松藩士・渡邊敏 (旧姓 浅岡) は明治・大正期に教諭や校長として長野県内の学校に勤め、信州における近代教育の源流を形成した教育者の一人。日本登山史において特筆すべきは、国内の近代登山のさきがけのひとつとして明治10年代に白馬岳登山を行ったことと、明治30年代以降、その教育上の有用性をいち早く解して学校集団登山を信州の山岳で実践したことです。

渡邊は幕末の1847 (弘化4) 年、陸奥国岩代安達郡二本松 (現福島県二本松市) で二本松藩士の浅岡家に生まれ、後に渡邊家へ養子に入りました。戊辰戦争への従軍を経験した明治維新後の1875 (明治8) 年、東京師範学校 (後に東京高等師範学校。現筑波大学の前身のひとつ) を卒業すると同年、開設まもない長野県安曇郡大町村 (現大町市大町) ・仁科学学校 (後の大町尋常高等小学校、大町小学校。現大町市立大町西小学校) へ訓導 (教諭) として招聘され、校長職を引き継ぎます。時に29歳。それから1884 (明治17) 年に仁科学学校長を辞するまでの10年弱の間、提琴 (バイオリン) での唱歌に合わせた体操や哑鈴 (ダンベル) を使った運動や水泳などの体育授業を行うほか、生徒と野外学習に出掛けて動植物や鉱物を採集したり化学実験を用いた理科授業を行うなどして、それまでの読み書き中心の学習ではなく実践的な教育を取り入れた新しい学習を展開しました。

第3章 信州理科教育のさきがけ — 博物学の士々群像 —

## 白馬岳最初の近代登山者

渡邊と登山については、大町在任中、図らずも白馬岳最初の近代登山者となっています。その様子は同行した当時の北安曇郡長、窪田畔夫（本名 重国）の日記「郡治日録」に残されています。

1883(明治16)年8月19日、渡邊と窪田は、地元の校長・教諭や山案内の猟師など総勢9人で細野(現白馬村八方)を出発し、白馬大雪溪の雪溪尻下部付近で露營。翌20日は大雨により停滞。21日に大雪溪を登って稜線に達し、当時の測量作業に利用された頂上付近の岩室小屋で食事をとります。この日の日記は「絶頂ニ登ル雲」で終わり、翌22日に無事下山。

19日の日記には「蠟石山ヲ視テ」\*とあり、白馬尻に至るまでの間に蠟石鉱物の山地を見学しているほか、20日の日記には「谷間ニ石質ヲ視」とあり、大雪溪から稜線にいたる間で地質を確かめています。これらの場面では渡邊が学術的な知見を披露したことも推測でき、後に盛んとなる博物学による学術的な登山の性質もうかがわせますが、この登山の主たる目的は自然の偉観にふれ、自身の剛健心を満たすことにあったといわれています。一方、窪田は郡長という立場から、下山後の帰路に「裏道見分ヲ乞フ」ていることから、同年から大町以北へ延長した新道に関して今後の工事ルートの下見も行って帰った可能性もあります。なお、渡邊と窪田の二人は、翌1884(明治17)年9月に烏帽子・鷲羽連峰方面などへの縦走登山も行ったようです。

※文中の読み仮名は編者による

## 学校集団登山の実践

渡邊と登山について、もうひとつふれておきたいことがあります。1896(明治29)年、渡邊は上水内郡長野町(現長野市長野)の長野高等小学校内に新設された長野高等女学校(後に移転。現長野西高等学校)の初代校長に就任。そして1902(明治35)年、同校生徒を自ら引率して2泊3日の戸隠山登山を実施しました。以後、同校での学校集団登山は毎年秋の恒例行事として十数年間実施され、渡邊は戸隠山や飯縄山(飯綱山)といった北信五岳などへ生徒を引率して登山しました。国内における男子生徒による学校集団登山は、明治20年代前半から長野県尋常師範学校などで行われていましたが、女子生徒による学校集団登山は長野高等女学校の戸隠山登山が最早期に行われたものと思われる。

このように渡邊が学校で生徒たちに登山をさせたのは、博物学の実地指導というほかに、山での体験を通して剛健心を養い、困難に耐えて克服する自信を得させることが主な目的だったといわれています。

さらに渡邊は女子生徒の体育と服装の改良にも積極的に取り組み、当時の服装改良の流れに前向きな意見を持っていました。明治30年代はじめ、広帯に和服という着物姿での登校が一般的だった女子生徒が体操などの全身運動をほとんどできない状況を改善しようと、渡邊は女子生徒に袴を着用させることを積極的に推奨しました。先述の長野高等女学校の戸隠山登山でも女子生徒たちは袴姿で登っていたといえます。

## 信州理科教育の発展と学校集団登山の広がり

信州の教育者で、高山植物研究などで知られる河野齡蔵は、渡邊について次のように述べています。

「(前略)余等が白馬岳の開祖の如くに思はれたのであるが、実は余より遙に先に、渡辺(原文ママ)先生が大町小学校長時代に、時の郡長窪田畔夫氏と、他一名の小学校長とを伴つて登山したのであつて、知識階級の登山者としては、先生が先登第一である。先生は当時白馬雪溪の上部で蠟石を拾はれたことはあるが、登山の目的は、博物の研究ではなくて、主として自然の偉観に接せんとするのと、剛健心の満足を求むるにあつたやうである。先生の此の精神は、其の後の行動についても知ることができる。／先生の長野高等女学校長時代に、上級生に例年戸隠登山をさせたことは、博物の実地指導と云ふ点もあるが、剛健の精神を養ひ、困難に堪へ得る自信を得させることが主目的であつたやうである。(後略)」

《河野齡蔵「渡辺敏先生と登山」(1930) 渡辺敏全集編集委員会編『渡辺敏全集』(長野市教育会、1987)から一部抜粋》 ※文中の読み仮名は編者による



渡邊は1917(大正6)年に70歳で白馬岳に再度登っていますが、河野はその際に同行しています。

国内において近代登山が普及する要因のひとつとなった1894(明治27)年刊行『日本風景論』の中で、著者の志賀重昂は「学校教員たる者、学生生徒の間に登山の気風を大に興作することに力めざるべからず」と力説しました。また、明治期以来、政府が推し進めた富国強兵策の影響が学校教育の中にも導入され、強健な身体を育成することが求められるようになります。さらに、1913(大正2)年に文部省(当時)が『学校体操教授要目』を公布し、学校体育の方向を具体的に示した中に、課外活動として登山が推奨されたことが学校集団登山の普及に拍車をかけたと考えられます。こうした影響があり、大正期には全国的に学校集団登山が広まったと思われます。

さらに、それまでの読み書き中心の学習ではなく、野外学習や科学実験などの実践的な教育を取り入れた新しい学習を展開させた明治・大正期の教育者たちが、高山の動植物や地質に関する調査研究のためだけでなく、自ら生徒たちを引率して、授業での遠足や学校集団登山で北アルプスなどへ登ったことも、長野県内での動きとしては見逃せません。国内の近代登山黎明期にあつて、明治10年代半ばに渡邊らが行った白馬岳登山や、明治30年代半ばから渡邊がはじめた戸隠山などへの学校集団登山は注目に値します。さらに後述する、明治・大正期に信州理科教育の質の高さを全国的に知らしめた中心人物であった河野齡蔵や矢澤米三郎、保科百助(五無齋)、志村寛(烏嶺)らといった植物・動物や岩石・鉱物などの博物学に通じた長野県内の教諭の士々も、信州の山岳をフィールドとした学術登山や生徒を引率しての学校集団登山を後年行っていますが、それらが持つ日本登山史上の意義を再度見つめ直したいものです。



渡邊敏の記念碑 大町市立大町西小学校

1920(大正9)年、大町時代の教え子たちにより、大町尋常高等小学校(後に移転、現大町西小学校)に渡邊の徳をたたえる記念碑の建立が企画され、翌1921(大正10)年に行われた序幕式に渡邊は夫妻で招かれ出席しました。

現在、この碑は大町西小学校の正面玄関前、庭木に囲まれた一角に建ちます。

碑に掲げられた「赤心報國」(真心をもって国のために尽くすの意)の題額は当時の日本海軍大将で元帥の東郷平八郎によるもの。渡邊の大町での功績を漢文で記した碑文は明治・大正期の教育者であり思想家などでも知られる杉浦重剛の撰によるものです。その文を書いたためののが野村素介。野村は幕末に志士として奔走し、明治・大正期に政府官吏を務める一方、書の名手と称されて明治政府の要人の墓碑などに書跡を残しています。これらを碑に刻んだ石勝(屋号)は当時、東京周辺で屈指の石工として知られた中村勝五郎とその配下による青山の石材店でした。

こうした当時一流の人びとの手による石碑から、教え子たちの渡邊への深い敬慕と謝意の念がうかがえます。



渡邊敏の銅像 長野県長野西高等学校

長野市大字箱清水にある長野西高等学校(旧長野高等女学校)の校舎正面には、渡邊敏の等身大銅像が建ちます。台座上に建つ現在の銅像は1996(平成8)年に再建立されたもの。1931(昭和6)年に建立された元の銅像は日中戦争・太平洋戦争時に供出されています。



## 《コラム》 長野県の学校登山の現状



学校登山は、長野県民の多くが中学生のときに経験する学校行事です。

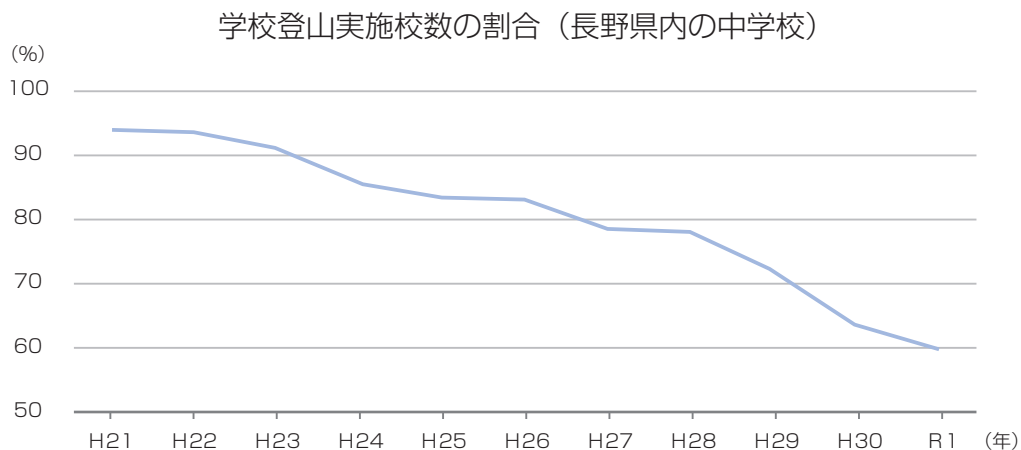
その学校登山というのは……

- ・登山時期は、7月の半ばから夏休みを挟んで9月上旬ごろまで。
- ・多くの学校が山小屋で1泊して、2日目の朝にご来光を拝むことを計画。
- ・長野県内で一番人気は硫黄岳、根石岳、天狗岳などのハケ岳。次に人気があるのが中央アルプスの木曾駒ケ岳。北アルプスの一番人気は、乗鞍岳と唐松岳。

(令和元年度の様子)

このような学校登山ですが、これからは県民行事といえなくなってしまうかもしれません。というのも……

平成21年度、長野県の中学校での学校登山の実施率は93.8%。なんと、9割を超える中学校で実施していました。それから10年後、年号が変わった令和元年度に学校登山を実施したのは、全体の59.7%に当たる111校。10年前は実施率が9割を超えていたのに、6割を割り込んできています。



(長野県教育委員会 学校経営概要調査のまとめ～小・中学校編～より)

とはいえ、6割近い中学校で学校登山を実施しているというのは、他県の方からすれば驚くべき数字なのかもしれません。

そして今年、新型コロナウイルス感染拡大の影響が学校現場にも大きく及んでいます。長期間の休校にもより学校行事を見直さざるを得ない状況となり、実施率は更に低下することが予想されます。

長野県山岳総合センターがかつて実施したアンケート調査でも、友達と一緒に山に登ることで、子どもたちが日頃の学校生活では学べない多くのことを学んでいることが伺えました。この学校登山が過去のものになってしまうことは残念なことです。学校登山の意義や実施方法についていろいろな立場の方が意見を出し合い、今一度考えてみる時期に来ているのではないのでしょうか。

(傘木 靖/長野県山岳総合センター 所長)

# 田中阿歌麿 *TANAKA Akamaro*

1869(明治2)～1944(昭和19)年

## 地理学者 日本の陸水学・湖沼学の先駆け



田中阿歌麿肖像(部分)  
【写真提供：百瀬寛氏】

地理学者で日本の陸水学・湖沼学の先駆けとして知られる田中阿歌麿<sup>たなかあかまる</sup>。東京出身の田中は1907(明治40)年8月に諏訪湖と野尻湖での調査を始め、前後から北アルプス周辺地域の湖沼として、まず初めに大町市の仁科三湖(青木・中綱・木崎湖)の調査を行っています。それ以降、20余年にわたり、信濃教育会北安曇部会をはじめとする県下の各部会などの協力を得て、高山湖沼の調査・研究を重ね、その成果を1冊にまとめました。それが書籍『日本北アルプス湖沼の研究』《信濃教育会北安曇部会 1930(昭和5)年刊行》です。ここでは、仁科三湖をはじめ、梓川・姫川・常願寺川・神通川・木曾川の上流域にある高山の湖沼など十数ヶ所について、各湖沼の地形や気候、水質や水生生物などを調査に基づいた科学的データを示して述べています。仁科三湖についてはことに詳細な記述があり、水産利用のほかにも周辺に残る遺物や和船、さらに伝説などについてもふれ、考古学や民俗学的な検証の頁もあり、多方面からの総合的な調査研究を行っています。

この写真は百瀬慎太郎の旧蔵アルバムに残されていた1枚で、1917(大正6)年に日本初の夏期大学として開講された「信濃木崎夏期大学」に講師のひとりとして招かれた際に撮影されたものと思われます。田中は第1回夏期大学では「湖沼物理学」、翌年の第2回夏期大学では「一般的湖沼学」の演題で講演を行っています。大正時代、地域の文化向上のため、より深い学問を学ぼうとする雰囲気は北安曇全域に高まり、こうした願いによって開かれたのが、同夏期大学でした。木崎湖畔に建つ信濃公堂を会場に毎年夏、全国から著名な講師陣を招いての講義が現在も休むことなく続けられています。

慎太郎は信濃大町の岳人として知られる人物ですが、短歌を趣向する文化人でもありました。田中との交流から1942(昭和17)年に次の一首を詠んでいます。「青木湖の青き水色フオーレルの四号※とかつて教へられにき(田中阿歌麿先生)」。

※フオーレル4号とは、湖面等の水面の色を計る際に用いられる指標液(水色標準液)のひとつ

## 高山湖沼の調査・研究

湖沼の調査は主に水面からの作業となります。高山の規模の小さな湖沼においても同様であったため、田中は海外から携帯可能な船艇<sup>せんてい</sup>である「可携艇<sup>かけい</sup>」の購入を試みますが第一次世界大戦直後という時節柄、入手できず、国内の隅田川造船所に製作を依頼しました。1920(大正9)年5月に竣成し、その年の夏、白馬大池で使用して以降、北アルプスの高山十数ヶ所の湖沼調査で使用して成果をあげました。その可携艇は、木造の骨組みに防水布を張ったもので、重さ60kg、艇身の長さ3.05m。かつて世界一周の科学的探検航海を成功させたチャレンジャー号を慕い「第2 Challenger 号」と命名しました。この船艇は折り曲げたり解体したりできなかつたため、山中での運搬には不便であったので、同様の造りで分解可能な重さ30kg、長さ3.60m、幅1mのカヤック式の船艇を1921(大正10)年に購入し、「Naiades 号」と名付けます。この船名は、ギリシア神話に登場する泉や川の精霊ナーイアス(ナイアス、ナイアデスとも)<sup>うき</sup>に由来すると思われます。その後、安定性を増すために艇身の両側に浮子を付けて改良し、調査に欠かせないものとなりました。しかし、1928(昭和3)年に保管先の日光湯元温泉で火災にあって消失し、現存していません。



田中阿歌麿による湖沼調査風景  
白馬大池 1920(大正9)年

田中阿歌麿による「第2 Challenger 号」を浮かべての白馬大池における湖沼調査の様子。1920(大正9)年夏撮影。写っている人物に田中はおらず、調査に同行した細野の荷担ぎ7人が写ります(左から4人目は後に山案内人として活躍する大谷定雄。ほかは、大谷喜栄、丸山岩司、高橋元栄、丸山信忠、丸山繁、丸山富治)。

7月下旬、田中は子息の田中薫(後に地理学・経済地理学者となる)ら付添いなどの者2～3人のほか、荷担ぎ7人とで白馬大池に登り、池の端に天幕を張って3泊し、水深を計測するなどの湖沼調査を行いました。携帯式の帆布製ボートなどを運び上げての調査であったため、多数の荷担ぎを必要としました。

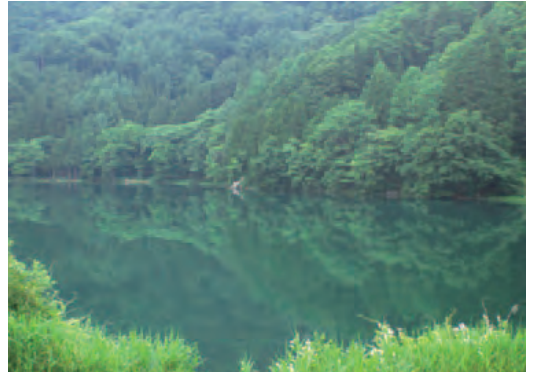


## 中綱湖畔の築場と定宿「和泉屋」

田中阿歌麿は、北アルプス山麓にある仁科三湖こと青木湖・中綱湖・木崎湖での湖沼調査では、中綱湖畔築場にかつてあった「和泉屋」を定宿にしていました。明治末期頃の築場や和泉屋の様子を田中は次のように記しています。

「中綱湖の北岸築場と云ふところから北に向けて一町(注約110m)計り進めば一條の川に依つて連絡した青木湖がある、(中略)川は青木湖から流れ出て、一の低い山を破つて急流を作り中綱湖に落るのである、二三軒の宿屋は此の川、深い川に跨つて設けられて入口と東西にある、(中略)築場には西山清市と云ふ人の經營して居る宿屋があつて此街道筋の小立場となつて居る。此宿屋は兩方に湖を望んで景色は

よし、又た旨い魚を味ふも出来る、馬車が大町と此地の北にある北條間に通ずるので、乗る客は主にも白馬岳の登山者、中には外國人もあれば稀にハムマーを持つた高山跋涉の日本學者もある、此點では一寸瑞西(注 スイス)が思ひ出される」



仁科三湖のひとつ中綱湖

【写真提供：大町市観光協会】

《田中阿歌麿『湖沼の研究』(新潮社、1911)から一部抜粋》

かつて和泉屋を営んでいた築場の西山家には、田中が毛筆でしたためたフランス語の墨書が遺されています。

こうしたフランス語の書について、田中の子息で神戸大学教授を務めた田中薫(地理学・経済地理学者)は次のように述べます。

### 《翻刻》

Les cimes  
néigeux  
des alpes et  
les eaux azurés  
des trois  
lacs sub-alpêtres

Pour M. Séi-ichi Nishiyama  
Yanaba le 16 Mai 1927.  
Ak Tanaka

### 《対訳》

(意訳)  
雪を頂いたアルプスの  
峰々と、その麓に連なる  
紺碧の三つの湖

(直訳)  
雪に覆われた頂のアルプスと、  
紺碧の水の三つの亜高山湖

西山清市殿のために  
1927年5月16日築場にて  
田中阿歌麿(印)

「父は長年北安曇の三湖に通つて、「日本アルプス湖沼の研究」という一書を残したが、ヤナ場がお気に入りの宿所だった。父の死んだ翌年の終戦直後、ヤナ場の宿を訪れたとき、この軸は横文字だというのが憲兵隊がやかましくて掛けておけなかつた、父が主人に書き与えた毛筆で書いたフランス語の書を見せられた。父はベルギーとスイスで教育を受けたので日本字が不得手なところから、田舎の湖沼めぐりで書をたのまれるといつもこの手でごまかしていたのである。」

《田中薫「館を訪れて…大町と私…」大町山岳博物館編『山と博物館』第6巻第12号(同館、1961)から一部抜粋》

築場の西山家で大切に保管されている軸装一幅の書は、残雪の北アルプス山麓に連なる紺碧の仁科三湖の様子を称えたもので、そのフランス語の筆跡は気品高く味わい深いものがあります。



田中阿歌麿筆 フランス語の書【原資料所蔵：西山保氏】



まるき ぶね まるき ぶね  
木崎湖の丸木舟(独木舟)  
くわり ぶね(割り舟)、トッコ  
【当館蔵】

田中阿歌麿の著書『日本北アルプス湖沼の研究』(信濃教育會北安曇部會 1930(昭和5)年刊行)では、仁科三湖について詳細にふれています。そこでは田中以外の専門家による考古学や民俗学的な記述もあり、青木湖でかつて使われていた丸木舟の一部が当時、田中によって東京で保存されているとあります。その舟の存在について、田中の子息である田中薫は次のように記しています。

「木崎湖からはトッコという前史時代の削舟が出土したが、その最新(昭和29年)の発掘標本が館の陳列にあるのを見て私はギョッとした。全く同じものが、それはおそらく最初の発掘品の仲間と思われるが、東京の父の家の玄関にあって戦災で焼失したのである。」(田中薫著「館を訪れて…大町と私…」大町山岳博物館編『山と博物館』第6巻第12号(同館、1961))

現在、当館で丸木舟の展示は行っておらず、この写真のとおり収蔵庫で民俗資料として保管しています。この資料は1954(昭和29)年に木崎湖畔で発見され、地元の方々より寄贈されたものです。全長273cmの舟体には栗材が用いられ、湖畔の人びとは「トッコ」と呼んでいたといえます。丸木舟は、巨木から採った丸太の単材を削り貫いて作られ、舟の中でも最も原始的な形をとどめ、世界各地で用いられたことが知られています。国内においても古くは先史時代から水上移動・運搬に用いられていました。

# 河野 齡蔵 *KONO Reizo*

1865 (慶応元) ~ 1939 (昭和 14) 年

## 信州理科教育の発展を担った博物学者・教育者



河野 齡蔵肖像  
【写真提供：百瀬義氏】

松本市出身の教育者・河野 齡蔵<sup>こうの れいぞう</sup>は、近代登山の黎明期<sup>れいめい</sup>において、北アルプスをはじめとする信州の山岳をフィールドとした学術登山を行いました。同じく博物学に通じた教育者・矢澤米三郎<sup>やざわよねさぶろう</sup>らとともに「信濃博物学会」を設立し、信州理科教育の発展を担いました。

河野は1865 (慶応元) 年、東筑摩郡島内村犬飼新田 (現松本市島内) の庄屋・河野通重<sup>みちしげ</sup>の四男として生まれました。齡蔵は1883 (明治 16) 年、18歳で中等科の教員免許を取得した後、さらに近代教育を学ぶために1885 (明治 18) 年に長野県尋常師範学校 (略称 長師 / 後に長野師範学校。現信州大学教育学部の前身のひとつ) に入學。元来の自然愛好と理科志向に加え、同級の矢澤米三郎らの影響を受け、植物に興味を持ち、飯縄山や戸隠山など近郊の山々へ植物採集に出掛けました。1889 (明治 22) 年の同校卒業後、県内の小学校や高等学校などに勤め、訓導をへて校長などを歴任しました。

## 大町小学校時代

1890 (明治 23) 年、大町にあった<sup>たんせいじ</sup> (弾誓寺) の境内に仮校舎が置かれていた郡立の北安曇高等小学校に訓導として赴任 (~ 1892 (明治 25) 年)、1897 (明治 30) 年には大町小学校 (現大町市立大町西小学校) に訓導兼校長として迎えられています (~ 1901 (明治 34) 年)。大町小学校時代、河野は校長として女子の就学率を向上させるために町費負担による教科書の配布、授業料免除、卒業生による同窓会を組織しての図書館開設などのほか、理科教育についても野外での自然学習を実践して陣頭指揮を執ったといえます。

河野は1896 (明治 29) 年に文部省 (当時) の尋常師範学校等における博物科のうち植物科教員の検定試験に合格し、植物分類、とくに高山植物の分類においては国内屈指の専門家となっていました。植物科の教員資格に加え、その後、博物科のうち動物・生理の各科の教員検定試験にも合格し、さらに長師や県内の女子高等学校に勤めることとなります。



大町小学校時代の  
河野 齡蔵 (部分)

【原資料所蔵：大町市立大町西小学校】

## 博物学者による初の白馬岳学術登山

大町小学校時代の1898 (明治 31) 年、河野は33歳のときに自身第1回目となる白馬岳登山を行っています。この登山は高山植物採集を目的とした学術的なもので、博物学者が白馬岳に登山した最初となりました。このとき、同じく博物学を趣向するものなど長師卒の後輩2人の教師が同行しており、この登山は彼ら3人によるものでした。

翌年の1899 (明治 32) 年、河野はこの登山の様子を信濃教育会の『信濃教育』に掲載し、翌1900 (明治 33) 年には『植物学雑誌』でも発表すると、全国の博物学者や山野草愛好家たちの注目を集め、白馬岳は高山植物の宝庫として一躍有名になりました。

その後も河野は北アルプス以外にも日本アルプス全域をフィールドとし、1904 (明治 37) 年には矢澤とともに赤石岳など八ヶ岳に登り、「ヒナリンドウ」を発見、1913 (大正 2) 年には南アルプスの荒川岳に登山し、「スルガヒョウタンボク」などを発見しています。このほかにも幾種類もの高山植物の新種を発見したり、高山植物の国内での新産地を発見したりしました。こうして、河野は高山植物の国内第一人者としてその名を知らしめることになりました。



## 高山植物研究に邁進した生涯



河野は1922(大正11)年から務めた諏訪高等女学校(現諏訪二葉高等学校)校長を60歳となった1924(大正13)年に辞し、松本の自宅に帰りました。しかし、松本第二中学校(略称 松本二中／現松本県ヶ丘高等学校)で嘱託の教諭を務めることになり教職は続き、北アルプスへの登山を行って高山植物の研究も継続しました。1931(昭和6)年、河野は67歳で松本二中の嘱託を解かれ、半世紀にわたる教員生活を終えました。しかし、高山植物の研究を続け、北アルプスのほか、信濃教育会からの委嘱を受けて千島列島や樺太などに渡って寒地植物の採集行を実施するなど、フィールドでの調査研究を行いながら、論文の発表や一般書の刊行を手掛けました。

河野は校長職時代から、皇族による北アルプス登山に幾数回同行して高山の動植物などの案内を行いました。晩年、72歳のときにも李王殿下の白馬岳登山に同行しています。1939(昭和14)年に75歳で亡くなるまで、植物を中心とした高山研究に邁進した生涯でした。

登山姿の河野齡蔵(部分) 1920(大正9)年8月 手塚順一郎撮影  
朝香宮殿下の槍ヶ岳登山に案内同行したときの様子。

## 《コラム》 活躍する先生たち－国語読本の「白馬岳」と松岡邦松、高山館と馬場治三郎－

本文中で採り上げている人物以外にも、明治・大正・昭和初期、北アルプスに自然科学のフィールドを求めて学術登山を実践し、信州理科教育を発展させて活躍した先生たちがいました。例えば、1898(明治31)年に河野齡蔵らと高山植物採集を目的に白馬岳へ登山した七貴尋常高等小学校(現安曇野市立明南小学校)の訓導・松岡邦松(当時満23歳。後に岡田姓)。河野と松岡は植物採集や研究を通じて親しい先輩と後輩の間柄でした。この登山には、同じく長師卒の後輩にあたる北城尋常高等小学校(現白馬村立白馬北小学校)の校長・吉沢秀吉(当時満24歳。旧姓沢山)も参加しており、彼ら3人によって行われたものでした。本文中で紹介した通り、河野がこの登山の様子を『信濃教育』や『植物学雑誌』で発表したことで全国の研究者らに知られるところとなった白馬岳は高山植物の宝庫として一躍有名になります。さらに白馬岳の素晴らしさを国内中に広めることになったのは、松岡が書いた「白馬岳」と題する作文が1918(大正7)年から尋常小学校6年生用の国語読本に採用されたことにありました。この白馬岳を紹介した作文が掲載された国語読本は1941(昭和16)年に国民学校へ切りかわるまで使用され、多くの児童たちに登山や山への憧れを抱かせました。

もう一例は、北城尋常高等小学校(現白馬村立白馬北小学校)訓導・馬場治三郎(号・華洲)。明治・大正期、白馬岳が急速に登山者を集めるようになるなか、山麓の同校は白馬岳登山とその発展に深いかかわりを持ちました。本文中で紹介した白馬岳最初の近代登山として記録される1883(明治16)年の渡邊敏らの同行者には、北城小学校校長・豊島三男人と同校訓導・加納直貫の二人がいました。また、先述した1898(明治31)年の河野らによる白馬岳登山の同行者には、当時、北城尋常高等小学校の校長・吉沢秀吉がいました。こうした白馬岳での自然探究に熱心な同校の伝統の上であって、1913(大正2)年、山好きの馬場が同校嶺方分教場の訓導として赴任してきました。馬場の同校在籍当時、校舎内に設けられた「高山館」という一室では、白馬岳に関する自然科学の各分野の標本や写真、模型などが展示されました。さらに内庭にはロックガーデン風の高山植物園があり、これら展示は児童たちの理科教育に貢献していたほか、近在の教員たちへの山岳知識の普及にとどまらず、白馬岳への登山者たちまでもが見学に訪れました。高山館の設置を提案し、その運営主任を務めた馬場を中心に同校の教員たちはこの施設の充実に誇りと情熱を持って献身的に尽くし、大正期の宮城方による白馬岳登山の際にはお立ち寄り場所の栄誉も得ました。しかし、昭和初めに馬場が同校を去った4、5年後からは高山館の活動を記した日誌の記録がなくなり、やがて展示室も片付けられ、入口に掲げられていた額も下ろされたといえます。

(関 悟志／市立大町山岳博物館 学芸員)

※参考文献は本誌巻末36頁記載のとおり



高山館の編集による1919(大正8)年発行の  
白馬岳の登山案内書  
表紙(左)と扉(右)部分【当館蔵】

# 矢澤米三郎 YAZAWA Yonesaburo

1868(慶応4/明治元)～1942(昭和17)年

## 信州理科教育発展を支えた博物学者・教育者



矢澤米三郎肖像

【信濃教育会「目でみる信州教育の100年」  
編集委員会編「目でみる信州教育の100年」  
(信濃教育会出版部、1987)43頁から転載】

に邁進。1905(明治38)年、長師女子部を分離して設置された長野県松本女子師範学校に初代校長として就任しました。教育者として信州の近代教育発展に尽くすなか、北アルプスなど信州の山岳における学術研究で明らかになったさまざまな事柄を幅広く一般にも広めました。

諏訪市出身の博物学を修めた教育者・矢澤米三郎<sup>やざわよねさぶろう</sup>は、信州の山野に広がるフィールドで学術調査を実践しました。とくに北アルプスなどの高山における動物・植物や地形・地質、気象などの各分野で学術研究を進め、その成果を数多くの一般書にまとめて高山の自然科学に関する普及にも努めました。高山の象徴とされるライチョウの研究を河野<sup>のれいぞう</sup>齡蔵らとともに先駆的に行ったことでも知られています。

矢澤は1868(慶応4/明治元)年、諏訪郡上金子村(現諏訪市大字中洲)の寺子屋師匠・矢澤正雄の長男として生まれました。長野県尋常師範学校(略称長師<sup>ちやうし</sup>)を経て、1893(明治26)年に東京高等師範学校(略称東京高師<sup>とうきょうこうし</sup>)。現筑波大学の前身のひとつ)博物科を卒業。1898(明治31)年からの2年間を東京高師研究科に学んだ後、長師の教諭となりました。長師の同窓であった河野らと乗鞍岳や白馬岳、八ヶ岳など学術的に未知のフィールドであった国内の高山を舞台にした学術研究

### 「信濃博物学会」設立とその後の展開

矢澤の長師時代にあたる1902(明治35)年、河野ら長師卒業の同志らが集まり「信濃博物学会」が設立されると、矢澤は幹事長を務めます。同会に携わった人びとは信濃教育会の理科教科書の編集・発行などに携わり、信州理科教育発展の素地をつくりました。長師内に設置されたこの学術団体は、その後、単に博物学の枠におさまらず、信州地方の山岳団体結成へと展開していきます。

1911(明治44)年に長野県内在住者を中心に100余名を集め、信濃博物学会の姉妹団体として「信濃山岳研究会」が結成されると、会長に矢澤、副会長に河野が就きました。同会発足に際し、松本女子師範学校を会場に8月8日から3日間にわたって山岳に関する各種講演が行われたほか、校内の5部屋を展示室にして、山岳写真・絵画・図書、高山植物や動物の標本、鉢植えの高山植物などの品々が展示されました。

その後、1919(大正8)年に信濃博物学会と信濃山岳研究会の両団体を母体として「信濃山岳会」が、正副会長に矢澤と河野、幹事長に牧伊三郎<sup>まきいざぶろう</sup>が就いて設立されました。同年のうちに信濃山岳会は北アルプス登山のためのパンフレット「日本北アルプス登山案内」を編集・発行しています。ここでは、登山ルートやコースタイムのほか、各山岳の地形・地質や動植物、歴史等にもふれられています。同会では1916(大正5)年に松本・大町間を全線開通させた私鉄「信濃鉄道」発行による路線と駅を記した登山路概念図の編集に協力したり、登山情報を提供するために登山相談所を設けたりしました。こうした同会の活動は1934(昭和9)年の中部山岳国立公園指定の際にも好影響を与えたとされます。



「日本北アルプス登山案内」

常念・槍・乗鞍方面之部  
信濃山岳會事務所 1919(大正8)年刊行  
表紙(左)と裏表紙(右) 【当館蔵】



## 登山熱の高まり — 博物学の学術団体に端を発した山岳団体の結成 —

先述のような、博物学の分野で研究を進めた学術団体が後の山岳団体結成の端緒となった出来事は、信州での事例に先行して東京でもみられたことでした。

1900(明治33)年に学生を中心とした「日本博物学会(後に日本博物学同志会)」が結成されるなど、このころから盛んになりはじめた博物学の分野において、高山に自然科学のフィールドを積極的に求める人びとが現れます。

この日本博物学会は、東京府第一中学(後に東京府立第一中学校。現在の都立日比谷高校)の生徒や卒業生らによって設立された動植物の採集と研究を行う有志のグループでした。同会では手書きの回覧雑誌『博物之友』(後に印刷配布へ移行)を創刊するなど、ここに集った学友ら青年たちの学術への熱意は高まります。こうした一部青年たちの集まりから発展し、イギリス人宣教師ウォルター・ウェストンの助言を得て、1905(明治38)年に日本初だけではなく東洋における最初の山岳団体として「山岳会」(後に日本山岳会)が結成されました。同会は、小島烏水(本名久太)ら7人の有志によって立ち上げられた組織で、設立当時は日本博物学同志会内の支会として発足したものでした。

こうした東京を軸とした国内全体の流れの一方、後に北アルプス山麓、信州では教育者を中心とした学術研究によって登山熱が高まりをみせていったことは、国内の登山史を探る上で見過ごすことはできません。

### 《コラム》 博物館や学校が所蔵する標本の価値

博物館活動は、展示を中心とした教育普及事業、資料収集保管事業、調査研究事業といった三本柱、あるいは展示を個別の事業としてとらえた四本柱を軸に展開されることが一般的です。日本では展示を主とした教育普及を行う社会教育施設や生涯学習支援施設としての充実度が博物館の評価を左右する要素ととらえられる傾向にあるようです。一方では調査研究を推進する研究機関としての機能も求められ、さらに近年では地域の自然文化を旅行者等に紹介する観光施設としての側面もさげばれています。しかし、世界的にみると、自然科学系である自然史博物館の評価はバックヤードに収蔵されている標本の数や質で決まるといわれ、それらの標本は過去から現在にいたるまで国際的にさまざまな調査研究に活用されています。

標本とは、動物・植物といった生物や岩石・鉱物など自然界に存在するものを繰り返し観察できるように適切な方法で保存したものです。自然史博物館ではこうした標本を資料として展示することで一般公開していますが、その多くは自然史に関わる研究の証拠資料として収蔵庫で大切に保管されています。なかでも、自然史博物館で最も大切にされている標本はタイプ標本(模式標本、基準標本)と呼ばれるものです。これは、ある生物を分類して新種として学名を命名し、その記載を行う際に基準とした標本のことで、その後の研究に用いられるとても重要なもので、それらは厳重に保存管理されています。

日本の北アルプスなどの高山帯にのみ生息する鳥で、高山の象徴ともいわれるライチョウ。そのタイプ標本は、アメリカのワシントンに本部があるスミソニアン協会が運営する国立自然史博物館に保管されています。その標本に付随する標本ラベルや標本台帳によると、これは御嶽山で1888(明治21)年7月29日にキクチ氏によって捕獲された個体で、当時の東京帝国大学博物館から1891(明治24)年に寄贈されたものといえます。

こうしたタイプ標本でなくても、現在、博物館などに収蔵されている生物の標本は、その動物や植物がある時点で確かに存在していたという物的証拠になるだけでなく、従来とは異なる観点で標本を再利用することで新たな情報を得ることができる貴重な実物資料です。近年では、科学技術の発達にともない、標本が秘めているより多くの情報を取り出して利用できるようにもなってきました。

2018(平成30)年、中央アルプスの駒ヶ岳で、約50年前に絶滅したとされるライチョウが半世紀ぶりに発見されたのを受け、環境省では中央アルプスでのライチョウ野生復帰に向けた事業を進めています。その中で、かつて中央アルプスで捕獲されたとされるライチョウの剥製が山麓の2ヶ所で保管されており、それらの剥製を遺伝子解析した結果、新潟県の火打山、北アルプス、乗鞍岳、御嶽山の集団に遺伝子が近いことが判明しました。このことは、現在、乗鞍岳に生息する個体を用いた中央アルプスでの野生復帰が妥当であるとの判断材料となりました。これらライチョウの剥製を所蔵していたのが、駒ヶ根市郷土館と上伊那郡の宮田村立宮田小学校でした。

また、松本市の信州大学松本キャンパスにある信州大学自然科学館が所蔵する大正初期のライチョウとされる骨格標本を詳細に計測して特徴を精査した上で、国内各地の遺跡で出土する同じキジ科の鳥の骨からライチョウの骨を特定し、かつてのライチョウの分布を解明するなどの研究も2019(令和元)年度までに進められています。

戦前の学校教育で使用された標本は、現在では教材としての利用価値をほぼ失っている上に、その多くは採集地や採集年月日等の情報がないことから自然史の標本としての利用が困難なため、学校現場では多くの場合、廃棄されてきたものと思われる。しかし、先述の事例のように、標本自体が残されていることで、今後将来の新たな調査研究で利用価値が生まれる可能性があり、博物館だけではなく、理科室などで学校に長年保管されてきた標本も今、再び見直されてきています。(関 悟志/市立大町山岳博物館 学芸員)

※参考文献は本誌巻末36頁記載のとおり



当館収蔵庫で保管している剥製標本の様子

# 保科百助(五無齋) *HOSHINA Hyakusuke (Gomusai)*

1868(明治元)～1911(明治44)年

教育者・地質学者 — 明治期を駆け抜けた唯一無二の奇才 —



保科百助(五無齋)肖像

【佐久教育会編「五無齋保科百助全集」  
(信濃教育会出版部、1964)口絵から転載】

保科百助(号五無齋)は1868(明治元)年、北佐久郡山部村(後に横鳥村、現立科町)に生まれました。「五無齋」の前には一時「蜻州」とも号しました。1891(明治24)年に長野県尋常師範学校(略称長師)を卒業後、長野県内、東北信地方の各小学校に教員として奉職。1900(明治33)年に蓼科高等小学校の校長として郷里へ赴任しますが、これは同年、同地に学校組合立として開校した蓼科実業補習学校(現蓼科高等学校)の校長も兼務してのことでした。しかし、1901(明治34)年、教職を自ら辞します。

退職の同年、第1回目となる長野県下漫遊の地学標本採集へと旅立ちます。半年間を越えるこの旅では、ハンマーを手に大八車を引きながら岩石や鉱物の採集を行い、ときに学校等で講演を行いながら各地を巡りました。その後、1909(明治42)年にも第2回目となる地学標本採集の旅に出ます。それぞれ半年余りの2度にわたる採集で、合計4百余種3万余塊以上の岩石・鉱物を持ち帰りました。採集した岩石・鉱物のほとんどは、保科のよき理解者であった渡邊敏が校長を務める長野高等女学校に送って仮置きされ、いずれの採集行のときも同校敷

地内に岩石・鉱物が山をなしたといえます。

保科の人並外れた行動力は地学標本採集にとどまりませんでした。長師時代に同窓教員の俸給平等運動を推進したり、教員在職中、人権教育を強力に実践したり、保護者配布用の学校新聞が当時の新聞紙条例違反だとして訴えられたりもしました。教員退職後には、苦学生を対象とした私塾「保科塾」を開設。そして、洒落っ気満載の狂歌集の刊行や、朱色の大八車を引いての筆墨の行商。また、自らが編集・発行人となって週刊新聞「信濃公論」を創刊。さらに、「Nigirigin式教授法」と称する地学の学習指導法を唱えたりしました。

1905(明治38)年には、読売新聞の紙上で募集した「奇人百種」で「保科五無齋」の紹介投稿文が「第一等」として掲載され、その唯一無二の奇才ぶりがより一層喧伝されることになりました。

天衣無縫で豪放磊落、ときに破天荒に映る振舞から距離を置かれることもあった保科ですが、一方では、その活動に理解を示して支えた人たちがいました。先述の渡邊敏はその最たるもので、渡邊は保科を評して「五無齋の如き者、信州に一無かる可らず、以て二ある可らず、蓋し彼はその天稟※に得たるものにして、後人の模倣を許さざるものなればなり」と述べています《横山健堂『師範出身の異彩ある人物』(南光社、1933)》。

※天から授かった資質、天賦。なお、文中の読み仮名は編者による

1911(明治44)年、保科は病に倒れて43歳でこの世を去りますが、入院先の病床には時の長野県知事をはじめ、多数の見舞いがあったといえます。没後、東北信地方の2ヶ所に五無齋記念碑が建立されたことから、人間愛と反骨精神に徹し、その信念に従って実践を貫いた教育者として多くの人びとに慕われたことが分かります。



五無齋保科百助碑  
津金寺(北佐久郡立科町)  
1912(明治45)年建立



五無齋保科百助碑  
加茂神社(長野市)  
1913(大正2)年建立



## 長野県地学標本

保科は長師時代に学友と植物採集をしたり、教職に就いた後には昆虫採集をしたりもしましたが、教員生活のかたわら、次第に岩石・鉱物の採集へのめり込んでいきました。

1895(明治28)年に武石村下本入産※1の緑簾石<sup>りょくれんせき</sup>を発見したのに続き、同年、浦里村越戸産※2の玄能石<sup>げんねいせき</sup>を発見しました。これらの出来事がきっかけとなり、当時の名立たる地質学者の小藤文次郎や神保小虎<sup>ここら</sup>といった東京帝国大学の両博士らと交流を持つようになり、百助の地質学に対する学究意欲は一層高まっていきました。さらなる地質学の高みを目指そうとしますが、博物学を修めた身ではあるものの、本格的な地質関係の研究を深めるには基礎的な学問素養が不足していることを指摘され、地質学の研究者ではなく採集者としての道を歩くことを決心したといえます。

この頃、保科は地域の教育会や学校の職員会などで、長野県産の岩石・鉱物は多種多様であることから、自分の名にちなんで百種百組の地学標本を注文に応じて作り、実費にて県下の各学校個々へ配ることを提案して、その場で予約を促します。若干名の予約者がありましたが、そのほかの人はまた例の法螺話だと受け流し、予約者からもその後冷やかし半分の催促<sup>さいそく</sup>を受けたりもしたといえます。そうした中、先述のとおり教職を辞した1901(明治34)年、百助は1回目の県下漫遊<sup>まんゆう</sup>の地学標本採集の旅へ出ます。採集した岩石や鉱物を標本用に整理し、1903(明治36)年、100組の長野県地学標本を県下の各学校に頒布<sup>はんぷ</sup>するとともに、各地で地学の講演会を行いました。まさに岩石・鉱物の採集者としての面目躍如となる標本寄贈を果たしました。

こうした無欲無私による保科の教育者としての姿勢は、機織<sup>はたおり</sup>・染色や養蜂、植林や治水といった技術の改良普及による実業教育と地域振興への取り組み、さらには1907(明治40)年の信濃教育会による「信濃図書館」設立に際して同館設立係員として尽力して自身の所有する蔵書一切を寄贈したことや、自身の採集した岩石・鉱物のほか動物・植物の自然史標本や考古学の出土遺物などの品々を展示する「信州博物館」設立を夢見ていたことから伝わります。

※1 現上田市武石下本入

※2 現上田市北西部および青木村大字当郷



岩石・鉱物採集姿の保科百助(五無齋)

1902(明治35)年11月

【佐久教育会編『五無齋保科百助全集』(信濃教育会出版部、1964)441頁から転載】



碓氷石灰翁碑

海ノ口上諏訪神社

(大町市平)

1889(明治22)年建立

1909(明治42)年の第2回目地学標本採集の際に保科百助が「石屋 五無齋」の名で記した「長野県地学標本採集旅行記」によると、同年7月8日に白馬經由で大町入りした後、7月15日に池田經由で明科へ向かうまで大町近辺に滞在しました。その間、常盤山崎では珪灰石、高瀬川上流では霰石(あられいし)(球状石灰石)の採集を地元協力者に依頼しているほか、大町小学校では子ども向けの講演を行ったりしています。大町滞在中、保科は葛温泉に3日間滞在していますが、その第1日目となる7月12日の日記には次のように記されています。

〔前略〕

午後三時平村のうち大出に至り遠山作十郎氏を訪ひ霰石の採集方を依頼し大枚のお金を支払ひ午後六時葛の湯に至る葛の湯は曾遊の地なり。

くつの名は いと聞き苦し 今日よりは

葉の御湯とも 五無は称へん

コハ明治三十五年中矢が崎奇峯兄と高瀬川上流の湯股に遊び東沢より有明山の南に出で中房温泉に浴したる折本歌りたるものなり。(中略)○○○(注 お酒)を頂戴し過ぎて大胃病に罹り身体の疲労を覚えたるの五無齋なれども高瀬川の浪音高き為め又半風子兄弟のため終宵眠ること能はず。午前三時に及ぶ。《佐久教育会編『五無齋保科百助全集』(信濃教育会出版部、1964)から一部抜粋》

保科が珪灰石採集を依頼した常盤山崎は、大町近郊における石灰採掘地として知られ、1875(明治8)年には3,000駄(約405～450t程度)、1900(明治33)年には1,990駄(約270～300t程度)の採掘実績が記録されています。山崎のほかにも大町近郊の石灰採掘地には平海ノ口がありました。ここでは1955(昭和30)年頃まで良質な石灰が採掘され続けました。その碓氷(そうかい)(創開)は1835(天保6)年と伝わり、この地に石灰坑を発見した平林翁による石灰採掘のはじまりを記した1887(明治20)年の窪田畔夫書による石碑が木崎湖畔の海ノ口上諏訪神社の石段前に建てられています。

# 志村 寛(烏嶺) SHIMURA Hiroshi (Urei)

1874(明治7)～1961(昭和36)年

## 高山植物研究に邁進した博物学者・教育者



志村寛(烏嶺)肖像

志村寛(号 烏嶺)は1874(明治7)年、栃木県那須郡烏山町(現那須烏山市)に生まれました。「烏嶺」という名はこの地にちなむ号です。栃木県尋常師範学校(現宇都宮大学教育学部の前身のひとつ)卒業後、栃木県などの小中学校や師範学校で教員を務め、1903(明治36)年に長野県立長野中学校(現長野高等学校)へ博物科(兼地理)教師として赴任。翌1904(明治37)年8月、このとき30歳の志村は、白馬岳と出合います。

長野市を徒歩で出発。柳澤峠に立って初めて白馬連峰を目の当たりにし、「代赭色の断崖、谷を埋めた残雪、夕陽に輝やく峰頭、実に荘厳を極めた雄姿に、突如頰桁をガーンと殴られたような気がした。那須、日光、浅間、八ヶ岳等かつて登山した山々とは全く桁違いの代物であった」《志村寛著「日本山岳会創立前后之見聞」「山岳」第50年号(日本山岳会、1957)※文中の読み仮名は編者による》と述べています。

いよいよ白馬の核心部、葱平に至っては、「絢爛艶麗なる所謂御花畑の光景、其の美其の麗、何物がよく比すべきものぞ。此天の樂園に逍遙する吾れは、心既に神、身はこれ仙」《志村寛著「白馬岳第一回登山記」志村寛・前田次郎共著『やま』(橋南堂、1907)》と心打たれ、八ヶ岳で専念する決心をした高山植物研究の道に邁進します。写真術の心得があった烏嶺は、この山行でもシャッターを切り、わが国最初期の山岳写真家の道も歩み始めます。

明治後期から大正初期、日本近代登山の黎明期にあつて、高山植物研究と写真撮影を二大目的とする山行を重ねるごとに、志村は登山家としても当時、その名を知られていくことになります。

当館には、志村が採集した植物腊葉標本をはじめとする関係資料が残されています。

## 白馬岳で新種の高山植物2種を採集

1904(明治37)年8月、志村は、自身第1回目となる白馬岳登山で葱平付近において採集したヒメウメバチソウとシロウマオウギの2種の植物を腊葉標本にして、当時、帝国大学理科大学(現東京大学理学部)の助手であった植物学者・牧野富太郎の元へ送って同定を依頼しました。その結果、両種とも新種であると確認され、牧野によってそれぞれの和名が命名されました。

志村は生涯で4,000種もの植物腊葉標本を作製したといわれ、その標本は本人や長男の志村濟美氏などにより、植物友の会(現公益社団法人日本植物友の会)をはじめ、国立科学博物館(TSN)や東京都立大学牧野標本館(MAK)、栃木県立佐野高等学校資料室、そして当館に収められました。

志村は、新種となるヒメウメバチソウを白馬岳葱平付近で採集したときの様子を次のように述べています。

「余獨り四近を探りて、しきりに採集す。こゝに一草を得たり、ウメバチサウに似たれども形態頗る瘦少可憐、一見して其の新種たるべきを認めたり。(中略)十數種を採り、歸來理科大学牧野氏の鑑識を乞ふ、果して新種なり。本種はパーナシャ、アルピコラなる學名と、ヒメウメバチサウ(原文ママ)なる和名とを得たるものなり。」



シロウマオウギ(マメ科)

【写真撮影・提供：  
当館学芸員 千葉悟志】

日本固有種。本州の高山帯(雨飾山、北アルプス、南アルプス、八ヶ岳)のひらけた草地に生える多年草。志村が採集した白馬岳葱平では今も本種の生育を見ることが出来ます。



ヒメウメ

バチソウ  
(ニシキギ科)

【写真撮影・提供：  
高橋秀男氏】

日本固有種で、本州の高山帯の湿った草地や雪田跡に生える多年草。

《志村寛著「白馬嶽第一回登山記」志村寛(烏嶺)・前田次郎(曙山)共著『やま』(橋南堂、1907)から一部抜粋》



## 白馬岳登山の裏側で－近代登山黎明期のエピソード－

国内の近代登山黎明期であった明治時代、志村の白馬岳登山には困難が多く伴い、志村自身が「今からみればそのような話」と後述した次のようなエピソードが登山の裏側で生じていたといえます。

1904(明治37)年8月の志村自身第1回目となる白馬岳登山は雨のない快晴が続きました。しかし、翌1905(明治38)年8月の前田曙山(本名 次郎)が同行しての第2回目の白馬岳登山は暴風雨に遭い、登頂を断念して途中下山。その後、雨は連日降り続くこととなります。同月のうちに第3回目となる白馬岳登山を計画した志村が、山麓の細野村で荷担ぎの協力を求めたところ、この年の天候不順は志村が昔からの地元の伝説を無視して岳山の靈域を犯したからで、今年は大凶作になると住民たちは信じており、誰一人として応じる者がいませんでした。やむを得ず役場や駐在所などへも依頼しますが、何かと理由をつけて応じようとはせず、そのうちに夏休みも終わってしまいます。9月に入り、ようやく神城村で荷担ぎを雇い、悪天候の中、白馬岳登山を決行しました。すると偶然にも連日続いていた荒天がおさまり、一転してこの頃から晴天が続くことになりました。

地元の意思に反して白馬岳登山を実行したことに怒りをおぼえた地元住民のなかに、志村が下山してきたら打ち殺してしまえというような物騒な話が持ち上がっていましたが、登山した日から連日の雨天が一転して日本晴れの快晴となったことに口実を失って事なきを得たといえます。

《志村烏嶺「近代登山草わけのころ」大町山岳博物館編『山と博物館』第3巻第5号(同館、1958)の記述を要約》



【上】志村寛(烏嶺) 白馬岳山頂にて 1956(昭和31)年8月

1916(大正5)年、志村は12年余りの長野中学校での勤務を終え、台湾へ渡って台中の中学校へ赴任します。1922(大正11)年の帰国後、長年にわたる教職を辞しました。長野中学校時代に欠くことなく毎年の白馬岳登山を行っていた志村でしたが、台湾からの帰国後は一度も北アルプスに足を踏み込んでいませんでした。それが、乗車した列車の車窓から目にした後立山連峰に、居ても立ってもいられなくなり、1956(昭和31)年、家族に無断で41年ぶりに白馬岳へ登りました。この写真はそのとき撮影されたものです。



なお、当館が所蔵する志村旧蔵の写真や著書の一部は志村本人から寄贈された品々です。1956(昭和31)年、83歳にして13回目、最後の白馬岳登山の折、当館に来館した志村から、開館5年を迎える当館の活動を激励していただき、後日、自身の写真や著書を恵送いただきました。

【左】晩年の志村寛(烏嶺)



杓子岳 白馬岳小雪渓付近から望む 1904(明治37)年8月 志村寛(烏嶺)撮影

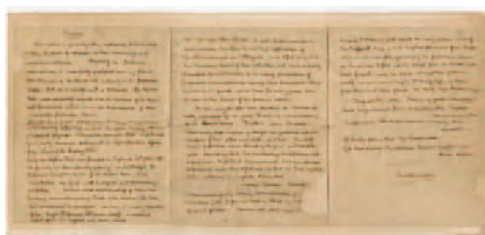
1913(大正2)年に発行された志村の著書『千山萬岳』にウォルター・ウェストン直筆による序文の原稿が掲載されています。

志村とウェストンとのかかわりは1枚の写真が取り持ちました。志村が自身第1回目の白馬岳登山の際、1904(明治37)年8月21日(または20日か)に撮影した白馬岳の小雪渓付近から望む杓子岳の写真が、1906(明治39)年2月に発行されたイギリス山岳会の機関誌『アルパイン・ジャーナル』第23巻171号に、ウェストンによる日本北アルプス登山と日本山岳会に関する記事とともに掲載されました(その写真解説は「THE NORTHERN YARI-GA-TAKE. A GARDEN OF ALPINE FLOWERS.」)。これが国外で初めて紹介された白馬山系の山岳写真とされます。この写真は1905(明治38)年4月、前田曙山(本名 次郎)、高頭仁兵衛(本名 式)を介して小島烏水(本名 久太)が入手し、ウェストンに渡ったものでした。

志村寛(烏嶺)の著書『千山萬岳』に掲載された

ウォルター・ウェストンによる序文原稿 【当館蔵】

原稿(1912(大正元)年の執筆か)は3枚で構成され、1913(大正2)年に高山房から刊行された本書には、この直筆原稿とともに訳文が巻頭に掲載されています。ここでは、「おそらく日本の如何なる山岳家も、登山家として將た植物家として、両ながら日本アルプスに就いて權威(オーソリチイ)を以て語ることを得るは、吾が友人志村氏に勝りて適任なる者はあらざるべし(後略)」とウェストンは志村に対して最大限の賛辞を贈り、この本を日本山岳会会員や広く一般に推薦しています。





# 山の博物誌 — 過去・現在・未来へ —

さまざまな山の魅力にあふれた北アルプス。現在、私たちは多様な目的によって山を楽しんでいます。一方、山と私たちとの間には環境問題をはじめ、種々の社会問題があり、それらを解決するために必要とされる現代的課題が数多くあげられています。

山岳トイレや登山道管理などの中部山岳国立公園におけるオーバーユースの問題、山岳遭難事故

と山岳救助にかかわる問題、景勝地やスキー場などの観光開発にかかわる問題、ダム・堰堤建設工事などの治水・利水にかかわる問題、地球温暖化・気候変動や野生希少動植物・帰化動植物にかかわる問題、雪崩・地すべり・落石などの山岳災害と治山・林業にかかわる問題……。

これら山岳にかかわる問題に関して、全ての問題解決に至る決定策は今のところ見出されていません。しかし、多くの人びとの知恵と経験を結集して、解決へ向けた現代的課題が示されてきています。

今、私たちにできることは何でしょうか。まずは、問題や課題の解決へ向けた第一歩として、私たち一人ひとりが北アルプスの山岳環境の現状と問題、現代的課題を知り、今そして未来に向けた北アルプスと人とのかかわりのあり方や自然と人との共生について、自ら考えてみる必要があるのではないでしょうか。

山には、自然科学はもとより人文・社会科学のさまざまな分野で探究され得る万事・万象があふれています。まさに「山の博物誌」といえるそれらの事象について体験的に学ぶことで、過去から現在、そして未来に向けた“北アルプスと私たちとのかかわり”の在り方を考えるひとつのきっかけとしたいものです。

信州理科教育のさきがけとなった明治・大正・昭和初期の博物学の士々が調査研究のために北アルプスの高山深谷を跋涉した当時と比べ、現在の山登りは、より便利で快適になりました。しかし、私たちが抱く山への憧れや、ときめきは昔も今も変わりありません。実際に山を登りながら自身の五感によって「山の博物誌」にふれることで、現代社会で失われつつある感性の輝きを取り戻してみませんか。



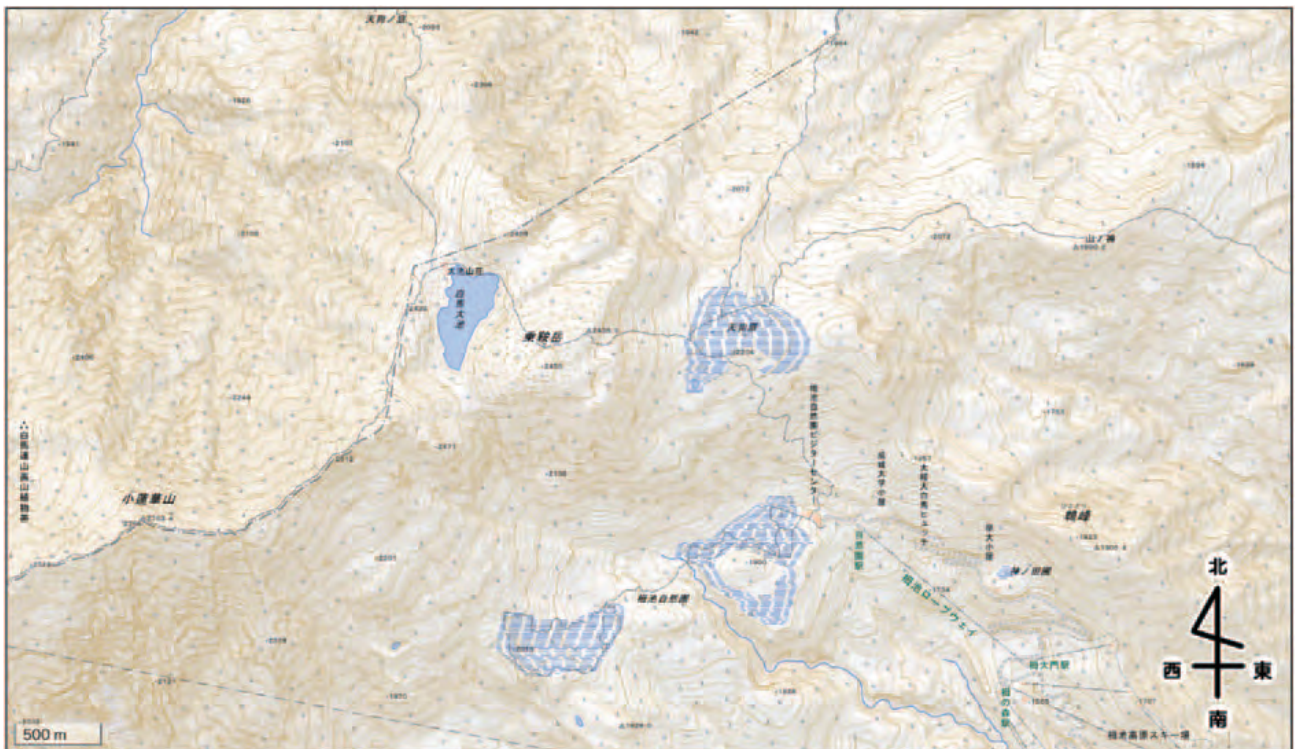
杓子岳 白馬岳小雪沢付近から望む

## 北アルプス後立山フィールドガイド－白馬大池周辺の博物誌－

ここでは、北アルプス後立山連峰の博物学にかかわる現地フィールドとして、白馬大池や白馬連峰周辺をピックアップします。そこにまつわる山の気象や地形・地質、高山植物や高山に棲む動物のほか、山の歴史や民俗などの山岳文化史といった山の博物誌について各分野のコラムでご紹介します。



白馬大池



白馬大池周辺の地形図

【国土地理院の電子地形図(タイル)を使用】



《コラム》 北アルプスは世界屈指の豪雪地



南米パタゴニア、ロッキー山脈、カムチャッカ半島などが世界の豪雪地として知られ、わが国の日本海側地域も有数の豪雪地です。世界の豪雪地のほとんどは、緯度40度よりも高緯度側や高標高地域に分布していますが、日本の豪雪地は標高も高くはなく北緯36度から38度程度の地域です。緯度も標高も比較的低いところが、日本ではなぜ豪雪地域になるのでしょうか。結論を先に述べると、シベリア大陸、チベット・ヒマラヤ、日本海そして脊梁山脈の絶妙な配置のなせる技です。冬期のシベリアでは、放射冷却による高気圧が、南側のチベット・ヒマラヤに堰き止められるために強化されます。シベリア高気圧圏内の乾燥した冷たい気塊が、西高東低の気圧配置による北西風により日本海上に吹走すると、暖流である対馬海流から多量の水蒸気と熱の供給を受けます。下層が暖かく上層が冷たいので積雲対流が起こり、上空に運ばれた水蒸気は速やかに雪結晶に変わります。次々に形成される積雲は、脊梁山脈によってさらに対流が強化されます。そのために、脊梁山脈の風上側にあたる日本海側地域には大量の雪が降るのです。

南北に連なる北アルプスでは、西側斜面で多量の雪が降るのですが、強い北西風のために東側に吹き飛ばされてしまいます。そのため、山脈の東側に吹き溜まりができ、それが雪崩れることにより谷底には多量の雪が堆積することになります。北アルプスに分布する7つの氷河や数多くの雪渓は、ほとんどすべてが稜線の東側に分布するのはそのためです。北アルプスの西側斜面はなだらかで、東側に急崖が多いのも雪の分布に起因しています。西側斜面は、風衝のために吹き飛ばされて雪が少なく、凍結融解作用により岩石の風化と緩やかな移動堆積が進みなだらかになります。東側では雪崩が頻繁に起こり岩石をも巻き込んで流下します。氷河が形成されれば、氷食作用による侵食も起こります。

氷河は、消耗（融解）量を上回る涵養（降雪）量が、長期間継続することにより維持されています。低緯度・低標高という消費量が大きな地域に氷河が分布する北アルプスは、世界的に極めて特殊な地域です。間氷期の現在も氷河が存続しているのは、絶妙な地理的配置がもたらす大量の降雪によるのです。

（鈴木啓助／市立大町山岳博物館 館長）

《コラム》 白馬大池火山の地形・地質

白馬大池と白馬乗鞍岳は、地質学で「白馬大池火山」と呼ばれている第四紀火山の一部です。「白馬大池火山」は東西約10 km、南北約12 kmの複成火山で、白馬乗鞍岳、風吹岳、蒲原山、稗田山などの山体を構成しています。80万年前以降に噴火を繰り返して形成されましたが、現在は活発な活動が認められません。

白馬大池火山の噴出物は、複数の安山岩質溶岩と火山碎屑岩からなり、噴出時期により旧期と新期に区分されます。旧期噴出物（図の緑色部）は、約80～50万年前に形成されました。当時の山体は浸食が進んでいるため、噴出地点は不明です。

新期噴出物（図の赤色部）は、約20万年以降に形成されました。白馬大池は、白馬乗鞍岳の溶岩により当時の河川が堰止められてできた湖と考えられています。風吹岳はカルデラ内に噴出した溶岩ドームであり、カルデラ壁との間に風吹大池が形成されました。

小蓮華山から風吹岳にかけての東側斜面には、大規模な地すべり地形が集中しています。柵池自然園や天狗原などの湿地は、地すべり地形の頭部に生じた陥没凹地と考えられています。白馬大池の形成過程には不明なことが多いため、湖底の堆積物を詳しく調べるなどして明らかにすることが望めます。湖底堆積物には、過去20万年間の地球環境の変遷などの興味深い情報も、地層として記録されていると期待されます。

（太田勝一／市立大町山岳博物館 専門員）





## 《コラム》 白馬連山高山植物帯

国の特別天然記念物〈1952(昭和27)年3月29日指定〉白馬連山高山植物帯は、岩小屋沢岳周辺から爺ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、五龍岳、唐松岳、白馬岳、雪倉岳、朝日岳、犬ヶ岳周辺に至るほか、三国境から小蓮華山・乗鞍岳周辺にも延びている南北に長い山岳エリアで、その総面積は120km<sup>2</sup>以上になります。

日本の高山は世界有数の多雪環境にあり、工藤岳氏によれば、「高山生態系の構成要素は、風衝地と雪田に分けられ、この連続体のなかでそれぞれ適した環境に分布域を持ち植物群落が形成される※1」としています。この広いエリアでも多様な植物群落が形成されているのは風衝地-雪田連続体によるものと考えられます。

日本の高山植物の研究者で故豊国秀夫氏は、日本の高山植物の種数を574種※2とし、故清水建美氏は440種※3としています。では、実際に登山ルートを迎るとどれくらいの高山植物を観察することができるのでしょうか。残念ながらその数はまだ示されたことはありませんが、これらのエリアの植物の特徴は、当館職員であった高橋秀男氏や平林国男氏、また東京農業大学名誉教授でいらした中村武久氏(いずれも故人)3名が白馬連山高山植物帯を広く超えるエリアを対象に行った調査で、多様な植生が成立している要因や各山岳の群落の特徴などが98頁にわたりまとめられています※4。

私たちが何気なく縦走し見る景色にはじつはこういった特徴があったのかと、先人たちの成果に触れるにつけ、このエリアがいかに魅力的であるのかを再認識し、見る景色や出会う高山植物との一期一会が今まで以上に楽しく思えてきます。

(千葉悟志/市立大町山岳博物館 学芸員)



白馬岳のお花畑

※1 大雪山のお花畑が語ること 高山植物と雪渓の生態学(京都大学学術出版会、2000)

※2 山溪カラー名鑑 日本の高山植物(山と溪谷社、1988) ※3 山溪ハンディ図鑑8 高山に咲く花(山と溪谷社、2002)

※4 白馬・後立山連峰とその東方山麓のプロラ(神奈川県立博物館研究報告第1巻第3号、1969年)

## 《コラム》 小蓮華山付近に生きるライチョウ

### 小蓮華山のライチョウ(夏のメス)



小蓮華山周辺にはライチョウはいつから、どのくらいいるのでしょうか。古い文献を調べると、1902(明治35)年12月15日信濃博物学会発行の信濃博物学雑誌第3号に、河野齡蔵が爺ヶ岳や白馬岳でライチョウについて調査し、解明された生態などの内容が掲載されています※1。中には「祖父ヶ嶽、白馬等信飛信越の界をなせる諸高山の優松帯には皆之を産します。」との記述もあり、この時代に白馬連峰では普通に見られたことが窺えます。

具体的な数字は、1979(昭和54)年に羽田健三らが行った白馬連峰北部のライチョウ調査にて示されました※2。なわばり数が白馬大池・乗鞍岳の山塊で12、小蓮華山の山塊(白馬大池から三国境)で16、羽数はこのなわばりに2.5をかけることで算出でき、前者では30羽、後者には40羽ほど生息していたことが推測されます。

また、この翌々年の調査で、同じ白馬連峰内でも山塊ごとになわばりが形成される標高が異なることが分かり、ライチョウの生息地は単に標高の高い所というのではなく、河野があえて優松帯と記述した通り、森林限界の上に見られるハイマツ帯の分布と結びついていることが示唆されました。

その後、2007(平成19)年から実施された肴倉孝明氏(山岳環境研究所)の調査によると、羽田健三が行ったときと比べて、なわばりの数・羽数はほとんど変化していないことがわかりました※3。

現在、全国的に見るとライチョウの数は減少しています。これは気候変動のほかに、人間の残すごみなどを求めて捕食者が侵入していることも要因といわれています。

長野県大町岳陽高校では、伝統的な全校登山で白馬岳や小蓮華岳周辺にも登ってきました。そこで目にしたライチョウの姿などから、自然を大切にすることを育んだ学生も多いことでしょう。

100年の時を経て今なお小蓮華山周辺でライチョウが見られるのは、明治から根付いている学術登山や理科教育も、目に見えない形で貢献をしているのかもしれない。〈文中、一部敬称略〉

(栗林勇太/市立大町山岳博物館 学芸員)

【参考文献】 ※1 河野齡蔵(1902)ライチョウ *Lepus timidus*, Gould. 信濃博物学雑誌, 3, 1-4.

※2 羽田健三・中村浩志・小岩井彰・飯沢隆・田嶋一善(1984)白馬連峰におけるライチョウのなわばり分布と個体数. 信州大学環境科学論集, 6, 71-76.

※3 肴倉孝明(2011)小谷村に生息するライチョウとその保全 - 白馬乗鞍岳周辺におけるライチョウの利用環境 -. 第11回ライチョウ会議石川大会報告書.

### 《コラム》 白馬大池のクロサンショウウオ

クロサンショウウオ (*Hynobius nigrescens*) は、山地や森林に生息する体長14cm前後の準絶滅危惧種に該当する両生類です。長野県北部に生息する個体は、雪解けの頃に白馬大池をはじめとするため池や湖沼などの高山の止水域に集まってきて、10-80個ほどの卵を収めた一对の白色不透明の卵嚢を産みます。約1ヶ月で孵化して、カエルで言うところのオタマジャクシの時期である幼生期は水の中で生活し、幼体となってからは倒木の下や土の中などで陸上生活を送りながら成長します。やがて、繁殖活動が可能な生体まで成長すると、雪解け頃に止水域に集まってきて産卵を行います。

白馬大池にはクロサンショウウオの卵嚢や幼生の捕食者となる魚類が棲息していないことから、彼らにとって非常に重要な成育環境が維持されていると言えます。われわれ人間が、本来は白馬大池に生息するはずのない外来生物を持ち込まないことは、クロサンショウウオの生息地を守っていくうえで非常に大切なことであるといえます。  
(藤田達也/市立大町山岳博物館 学芸員)



クロサンショウウオ(成体) [写真提供: 宮畑周平氏]

### 《コラム》 山小屋物語 – 北ア最初の近代登山者向け営業小屋・白馬頂上小屋を開設した松沢貞逸 –

標高約2,300mの白馬大池畔に建つ白馬大池山荘。この場所に山小屋が初めて建てられたのは1916(大正5)年のこと。これは、蓮華温泉方面からの登山路整備にあわせ、新潟県西頸城郡郡役所が新潟県費補助を受けて建設した8畳ほどの避難小屋でした。大正中・末期頃には、池畔に売店兼宿泊の営業小屋が建てられました。1933(昭和8)年以降、この山小屋の権利を取得した北城村四ツ谷の糸(ヤマキ)旅館と白馬館、現在の株式会社白馬館の経営により今に至っています。白馬館は現在、白馬大池山荘を含め、白馬山荘を筆頭に白馬岳連峰周辺で山小屋7軒を経営するほか、柵池高原、鐘の鳴る丘ゲレンデの経営、さらには旅行業、東京案内所などを運営する山岳リゾート会社です。その礎を築いたのが、糸旅館の松沢貞逸でした。

貞逸が白馬岳に初めて登ったのは1900(明治33)年、11歳のときであったといえます。このとき、山頂では測量の際に組まれた樁跡、山頂直下では測量作業の宿泊地として使用された石室跡を目にしたことでしょう。

その後、測量で使われた石室跡地の使用権利が承認されたのが1905(明治38)年、貞逸16歳のときとされます。その頃から石室の補強材が荷上げされ、徐々に整備されていきました。小屋開設時の様子やそれまでの経緯は詳らかではありませんが、小屋開設の助言をされ、貞逸と一緒に白馬岳登山をして調査したのは、再三の白馬岳登山で糸旅館を定宿にしていた矢澤米三郎ではなかったかと推測されています。同時に貞逸は河野齡蔵からも影響されたと目されています。また、北城小学校に赴任したスキーにも関心が高かった山好きの先生、馬場治三郎とも懇意にし、貞逸は馬場と相談してスキー講習会を開催するなど、白馬でのスキー普及の先鞭もつけています。

信州の教育者と明治・大正期の山小屋建設とのかかわりは、このほかにも、河野が携わったと推測される大沢石室(大正6年)や長野県設置石室(大正8年)、南安曇教育会の二ノ俣石室(大正6年)、常念校長こと佐藤嘉市(号 藤山)が結成した常念岳研究会による前常念岳の石室(大正8年)などにも見られ、当時、学術登山を実践した教育者らは博物学による登山や学校集団登山というソフト面だけでなく山小屋建設というハード面においても大正登山ブームにつながる影響を与えた存在であったといえます。

10年以上野ざらしになっていた石室跡を整備した白馬頂上小屋は、石積みで外壁側面などを補強した木造小屋を1907(明治40)年に石室跡地に新設して本格的に開業し、北アルプスの近代登山者向け営業山小屋の最初となりました。白馬山荘の前身です。その頃の写真(本誌6頁参照)から類推すると、測量用の石室跡地の使用権を得た1905(明治38)年以降の当初は従来あった石室跡を改築し、石積みの壁に置き屋根をしたものと考えられます。その後、1907(明治40)年にその石室に併設して木造小屋が新築され、側面などの外壁を軒まで石積みで補強し、従来の石室は解体して周囲を整備したものとされます。

その後の登山者の急増にともない、その小屋にかえて1915(大正4)年に木造小屋2棟を新築。翌1916(大正5)年には白馬大雪深末端部にあった石室を組立・解体式の木造小屋である白馬尻小屋として開業。経営者・事業者としての手腕を發揮した貞逸でしたが、1926(大正15)年に乗合自動車による不慮の事故で37歳の若さで急逝してしまいます。しかし、貞逸の意思は後人へと受け継がれ、その後の鍾温泉小屋や白馬大池小屋の経営などの事業拡大へとつながりました。

現在、白馬連峰の近代登山発展に尽くした貞逸の功績を記念し、山の安全祈願とともに白馬連峰の山開きを告げる「貞逸祭」(白馬連峰開山祭)が、1967(昭和42)年の第1回以降、猿倉から白馬大雪深で毎年5月に開催されています。

(関 悟志/市立大町山岳博物館 学芸員)

※参考文献は本誌巻末36頁記載のとおり





## 《コラム》 雪形伝承と山名考－小蓮華山の「コウマ」と白馬岳の「シロカキウマ」－

小蓮華山には主稜の東端、雷鳥坂にあたる稜線の下に「コウマ(仔馬)」と呼ばれる黒い雪形が出るのが知られています。

白馬岳の山名由来は雪形にちなむとされ、定説では白馬岳の白く雪が付いた斜面の中に黒い山肌部分で形づくられた「代かき馬」の雪形が出現することから「しろうまだけ」と称し、本来なら「代馬岳」ですが「白馬岳」の漢字が当てられたとされています。しかしながら、「代馬岳」と表記された絵図や古地図はこれまでに確認されていません。

そうした中、小蓮華山に出現するコウマこそが、かつて代かきの適期の目安とされた雪形であったという説もあります※1。雪形出現場所の地形的特性から、白馬岳のシロカキウマの雪形が1年を通じて長期間、比較的变化のない姿を見せるのに対し、ある日を境に一気に胴体部分がつながって馬の形を見せる小蓮華山のコウマの雪形の方が、実際の代かきの目安になったのではないかといいます。

白馬岳山麓の地元・白馬村に残る江戸後期1825(文政8)年の絵図「山論濟口絵図」(横沢家保存)には、読み仮名は不明ですが「白馬嶽」「白馬沢」という地名が記されています。これは、隣接する塩島新田村(現白馬村塩島)と千国村(現小谷村千国)の両村間で1823(文政6)年に山地草刈場を巡る境界争論が起き、領主である松本藩の仲介によって7年後にようやく解決をみましたが、その係争の和解に関する古文書に添付された絵図です。この絵図で「白馬沢」と記された沢筋は現在の松川上部の白馬沢と同一と推定されますが、「白馬嶽」と記された山は描かれている位置関係からすると現在の小蓮華山を示すと推定されます。その「白馬嶽」と描かれた山の左手、南方には「薬師たけ」「鑓ヶたけ」と記載された山々が連なりますが、現在の杓子岳と鑓ヶ岳と推定されます。「白馬嶽」と「薬師たけ」との間の奥に描かれた「両替山」「越中／越後／信羽三ヶ國／御境」と記され、「両替山」乗くら大峯□(判読不明。追か)／越後信羽境との記載がある付箋が貼付された山は、位置関係からして現在の白馬岳を示すと推定されます。現在確認できる史資料の中ではこの絵図が「白馬」と表記された山名の最初期のものですが、記された漢字の山名は読み仮名不明であり、描かれた山は現在の白馬岳ではなく小蓮華山を指しているものと推定される点に注意を要します。山名を含む地名の音韻変化・発音転訛と漢字誤記・誤読は近世のほかの絵図等でも事例が見られることから、この絵図に記された「白馬嶽」の山名は慎重に考証する必要があります。

現在の小蓮華山が、先述のようにかつては雪形伝承を起因とする山名で呼ばれていたのであれば、この絵図に記された「白馬」は代かき馬を意味する「しろうま」の呼称に対する当て字という可能性もあります。さらに、同絵図に記された「両替山」は信州から越中と越後の両国を越える山の意(あるいは越国三州のうち二州の意か)による「りょうこ(ご)へ(え)」が「りょうか(が)へ」と音韻変化・発音転訛し、その音韻に見合う漢字が便宜的に当て字として採用されたとも推測されます。そうした意味では「両越山」の字を当てた方が適切とも考えられます。

近世の地元地域において「白馬」の漢字を冠する山岳が付されたのは現在の小蓮華岳のみかというそうではなく、ほかでもない現在の白馬岳にも「白馬」の名が付けられていたようです。筆者は実物を確認できていませんが、前述した文政年間の山論時、別に作成された1824(文政7)年の「山論濟口繪圖」(西澤家蔵か)の存在が報告されています※2。その絵図の部分模写図には「白馬の嶽」「白馬嶽」という山名が記され、前者は「千國(千国)村名附(名称)」と記されて現在の白馬岳を示し、後者は「塩島村新田村名附(名称)」と記されて現在の小蓮華岳を示すものと推定されます。また、現在の白馬岳と推定される山には「両かへの嶽」という山名も併記され、こちらは「塩島村新田村名附(名称)」と記されています。本絵図に記された「白馬嶽」こそが現在の白馬岳を指して「白馬」と表記された初出ということになるでしょう。

なお、現在の白馬岳は近世において上記以外に、信州側では「乗鞍嶽」「乗鞍山」、越中側では「上駒ヶ嶽」、越後側では「蓮花山」「大蓮華山」などと呼ばれていたといえます※3。

冒頭で定説とされている白馬岳の山名由来をご紹介しましたが、現在に至るまで、白馬岳の呼称は「しろうまだけ」なのか「はくばだけ」なのかという議論がたびたびなされてきています。近年でも、白馬岳山麓の地元である白馬村内に生まれ育った住民からは、白馬岳のことを「しろうま」ではなく「はくば」と古くから呼称していたという指摘もあります※4。それによると、現在70～90歳代の地元住民の方々がかつて自分の親族や地元の古老たちから聞いた現在の白馬岳の山名は「しろうま」ではなく「はくば」であったといえます。つまり、少なくとも近世末から明治中期頃生まれの地元住民たちがそのように称していたということになります。こうした事例は、地元地域や家庭などで元来伝承されてきた山名が「はくば」ということなのか、あるいは明治末・大正初期には一般的になりつつあった「はくば」という呼称が地元住民にも山名として広く採用された結果なのかは今のところ不詳です。いずれにしても、明治期に白馬岳登山を行い、その山行の様子を記した当時の学術登山者や近代登山者たちに山名称呼や山名由来を語ったのは、ほかでもない山案内人として同行するなどした山麓の地元住民たちであることは文献から明らかです。

白馬岳の山名由来については、すでに先学諸氏が関係史資料における状況を報告しながら論考を行っています※5。これらをふまえた上で、地元ではどのような呼称が用いられてきたのかを史資料や文献から今一度考証する必要があります。とくに、近世の絵図に記された内容と明治期に学術登山や近代登山で白馬岳に登った者が記した内容を重視したいものです。繰り返しになりますが、それらの内容は近世以前から周辺山域を生活圏としていた地元住民による呼称であり、明治期以降、登山者を案内した地元山麓の山案内人や荷担ぎたちが実際に称していた山の呼び名やその由来を聞き取ったもので、一部ではあるかも知れませんが地元地域あるいは地元住民の当時の認識を今に伝える重要な記録であると捉えるべきではないでしょうか。

(関 悟志／市立大町山岳博物館 学芸員)

※1 長沢武「北アルプス白馬連峰－その歴史と民俗」(郷土出版社、1986)27-28頁

※2 中島正文「白馬岳志雑致」『北アルプスの史的研究』(桂書房、1986)290頁掲載図、長沢武「山名の移り変わり」『北アルプス白馬連峰－その歴史と民俗』(郷土出版社、1986)27頁掲載図

※3 中島正文「白馬岳志雑致」『北アルプスの史的研究』(桂書房、1986)274-306頁

※4 2019年10月5日開催 白馬山案内人組合創立100周年記念イベント「HAKUBA山フェスタ」(会場：白馬村ウイング21)パネルディスカッション「白馬岳「はくば」か「しろうま」、どっちがホント?」、白馬山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会編「Part 3 白馬連峰を知る ①「白馬岳」はハクバかシロウマか－「代馬説」への疑問」白馬山案内人組合創立100周年記念誌 百年の息吹(白馬山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会、2019)26-28頁

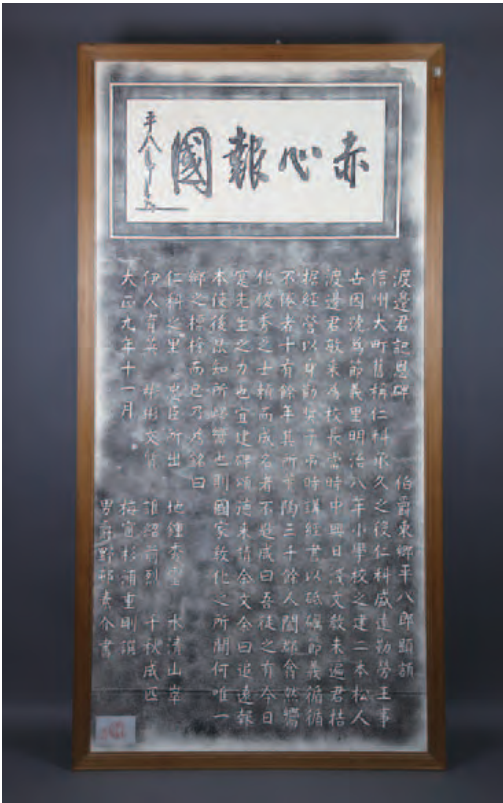
※5 中島正文「白馬岳志雑致」『北アルプスの史的研究』(桂書房、1986)274-306頁、長沢武「山名の移り変わり」『北アルプス白馬連峰－その歴史と民俗』(郷土出版社、1986)24-31頁、三井嘉雄「白馬岳という山名」『黎明の北アルプス』(岳(ア)リ書房、1983)143-150頁

# 展示資料図版（実物資料）

ここに挙げた資料は、展示資料のうち、展示パネルに挿入した写真資料を除く実物資料である。なお、写真は全て当館撮影による。

## 第3章 信州理科教育のさきがけ — 博物学の士々群像 —

渡邊 敏

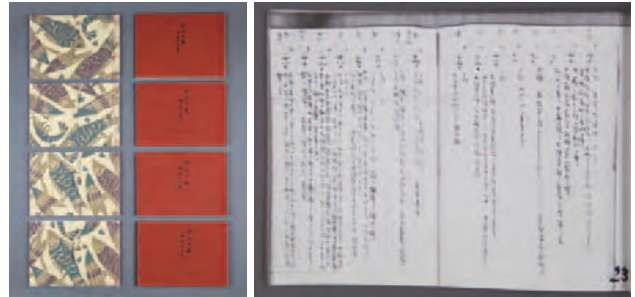


Ⅲ 1-1 渡邊敏記念碑の拓本（額装） 大町市立大町西小学校蔵

1920（大正9）年、大町時代の教え子たちにより、大町尋常高等小学校（後に移転、現大町西小学校）に渡邊の徳をたたえる記念碑の建立が企画され、翌1921（大正10）年に行われた序幕式に渡邊は夫妻で招かれ出席しました。現在、この碑は大町西小学校の正面玄関前、庭木に囲まれた一角に建ちます。この拓本は、石碑に刻まれた碑文を写しとったものです。



Ⅲ 1-2・3 渡邊敏筆の書（軸装） 大町市立大町西小学校蔵



Ⅲ 1-4 窪田畔夫筆『郡治日録』写し 8冊（1879（明治12）～1886（明治19）年）  
一般社団法人北安曇教育会蔵

※右は1883（明治16）年の冊子に綴られている白馬岳登頂部分の頁

『郡治日録』は、窪田畔夫が北安曇郡長拝命の通知を受けた1879（明治12）年1月3日から1886（明治19）年の郡長辞職まで、郡長在職中の8年間の出来事を記した日記録です。その中で、1883（明治16）年8月18日から22日までの記録に、大町を出発して渡邊敏らとともに大雪渓から白馬岳山頂まで登った様子が記されています。

この写しは、原本を複写機で複写（モノクロコピー）したものとされ、千代紙の表紙を付けて年ごと1冊ずつ和綴りに製本されています。

なお、窪田や渡邊ら一行による1883（明治16）年8月の白馬岳登山に関しては、同年8月の『北城学校日誌』にも記録されていたことが分かっています。これは、登山一行の同行者の中に、北城小学校校長の豊島三男人と同校訓導の加納直貴の二人がいたことからでした。

### 田中阿歌磨



Ⅲ 2-1 田中阿歌磨 著『日本北アルプス湖沼の研究』  
信濃教育會北安曇部會 1930（昭和5）年刊行

本書は田中が著した北アルプスとその周辺地域の各湖沼に関する研究論文集です。田中自身の稿のほか、各専門家諸氏が研究論文を寄せたり資料を提供したりし、総頁数は1,000頁を超える大書となっています。



Ⅲ 2-2 田中阿歌磨 著『湖沼めぐり』  
博文館 1925（大正14）年刊行＝10版

富士山麓周辺の湖をはじめ、琵琶湖や東北の湖など、湖沼調査で巡った国内の湖について記したもので、初版は1918（大正7）年。長野県内は諏訪湖と野尻湖が採り上げられています。序文で、田中が湖沼研究を志すきっかけとなったのは、幼い頃に父に連れられて登った富士山から眼下に望んだ湖沼風景にあると回顧しています。



## 河野 齡蔵



Ⅲ3-1 河野齡蔵使用の山高帽  
白馬村教育委員会蔵(白馬村歴史民俗資料館展示)

この帽子は河野愛用のものと伝わります。河野は大町小学校(現大町西小学校)時代の1898(明治31)年、33歳のときに自身第1回目となる白馬岳登山を行っています。この登山は高山植物採集を目的とした学術的なもので、博物学者が白馬岳に登山した最初となりました。



Ⅲ3-2 河野齡蔵採集の植物腊葉標本  
ヒメツルコケモモ(ツツジ科)  
白馬村教育委員会蔵(白馬村歴史民俗資料館展示)

台紙には「河野氏所蔵」と印字されたラベルが貼付され、そこには植物名とともに「樺太 敷香 ツンドラ地帯」「昭和八年七月一日」とペンによる手書きの書込みがあります。河野は信濃教育会の委嘱により、1933(昭和8)年に寒地植物研究のため札幌を経て樺太に渡り、現地の山岳やツンドラ地帯を調査しています。この標本はその際に採集したものと思われる。



Ⅲ3-3 河野齡蔵使用の名刺  
松本市四賀出身の小学校教諭で植物研究者の横内斎(いつき)旧蔵のもの。「河野齡蔵」と印字された右側には「長野縣史蹟名勝天然記念物調査委員」というペンによる書込みがあります。



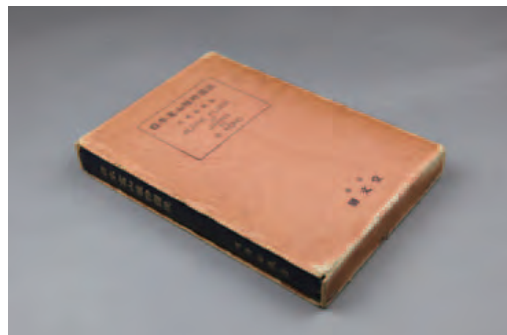
Ⅲ3-4 河野齡蔵 著『高山研究』 岩波書店 1927(昭和2)年刊行

河野は1893(明治26)年に初めて高山での植物採集を乗鞍岳で試み、1898(明治31)年に白馬岳登山で動植物採集を行って以来、約30年間に国内の高山に登山したのは、この本の刊行までに100回を越えたと本書で述べています。その間の学術的な登山での調査・研究による現時点での成果を科学的に一冊にまとめたのがこの本といえます。造山作用や氷河などを含む地形・地質、高山の気象や雪氷、高山の植物・動物について解説しています。また、近代登山が盛んになった昨今の状況をふまえて、高山の動植物の保護についてもふれています。



Ⅲ3-5 河野齡蔵 著『信濃郷土叢書 第十編 日本アルプス』  
信濃郷土文化普及會 1929(昭和4)年刊行

全12巻からなるこのシリーズ本は、長野県内の歴史・人物や自然について、各分野の専門家が各テーマで一般向けに著した小冊子です。河野による本書は自身作画の図を挿入して、日本アルプスの地質や動植物などを解説。巻末には北アルプスと中央・南アルプスの登山路概念図が付きまます。



Ⅲ3-6 河野齡蔵 著『日本高山植物圖説』  
朋文堂 1931(昭和6)年刊行=第3版

昭和初期の当時、高山への登山者も増え、高山植物の研究やその培養も盛んになってきましたが、その研究のための文献資料は僅かで、しかも分類による高山植物図鑑は皆無で、実物によって調査する際には不便であることから本書を編纂したと河野はその冒頭で述べています。同書では329種の植物が科別に解説され、科別のほか和名の索引が添えられています。書中には50頁を越える図版が挿入され、「雲峯(うんぼう)」の画号で絵も描いた河野直筆による彩色の植物スケッチ図が付されています。この本は宮中にも献上されました。

## 矢澤米三郎



Ⅲ4-1・2・3 矢澤米三郎・河野齡蔵 共著『日本アルプス登山案内』  
岩波書店 1916(大正5)年刊行=初版【左】  
1917(大正6)年刊行=4版【中央】  
1923(大正12)年刊行=11版【右】

この本は当時出版されていた日本アルプス登山のガイドブックとして異色で、高山の植物・動物や地形・地質を中心として書かれており、10数版を重ねるほどの好評を得ました。

携帯に便利なポケット版の本は日本アルプス全体からはじまり、北・中央・南アルプスの各山域の主要な山岳について紹介しているほか、付録として八ヶ岳、浅間山、戸隠山を紹介しています。巻末には付録として登山心得が付されています。各山岳紹介の最後には植物目録があり、そこに生育する高山植物があげられています。さらに、ニホンカモシカやライチョウ、高山蝶などの動物のほか、氷河地形など特徴的な地形・地質なども解説され、山の博物についてふれています。また、50点ほどの図版が挿入され、山岳の写真や概念図以外にも、動植物のはく製や標本の写真やイラスト図などが豊富で、学術的な視点から編集されています。

第7版の序文に「特に日本アルプス會と信濃山岳會とは、協力して登山の指導提擧に任じ、或は顧問となり、或は忠友となりて其便宜を與へき」とあります。「日本アルプス會」とは、登山道整備や山小屋建設、山案内人の養成、自然保護などを目的に1917(大正6)年設立された組織で、同会の総裁には松本市出身の教育者・沢柳政太郎(当時、東京・成城学園中学校長)が就いていました。

一方の「信濃山岳會」は、矢澤米三郎と河野齡蔵らが結成した「信濃博物学会」とその姉妹団体である「信濃山岳研究会」の両団体を母体として1919(大正8)年に設立された組織で、その当時、正副会長に矢澤と河野、幹事長に牧伊三郎が就きました。

なお、本書を含めて矢澤は岩波書店から自著を複数冊刊行しています。岩波書店の創業者・岩波茂雄は、矢澤よりひと回り余り年少ですが、矢澤と同郷の信州諏訪出身でした。



Ⅲ4-4 矢澤米三郎 著『上高地』  
岩波書店 1928(昭和3)年刊行

上高地とその周辺山域の自然等について、写真図版を挿入しながら説明した。矢澤は序文で、上高地が国立公園の候補に挙げられ、天然記念物の保護区域に指定されたのは至極当然のことと述べています。上高地はこの本が出版された1928(昭和3)年に国の名勝および天然記念物に指定され(1952(昭和27)年に国の特別名勝及び特別天然記念物に指定)、その後、1934(昭和9)年には上高地を含む北アルプス一帯は中部山岳国立公園に指定されました。



Ⅲ4-5 矢澤米三郎 著『雷鳥』  
岩波書店 1929(昭和4)年刊行=1刷

当時のライチョウに関する学術的な研究を総覧した一冊。羽毛の季節変化を示した剥製標本や形態を示した骨格標本などの写真図版が挿入されています。



Ⅲ4-6 矢澤米三郎 著『白馬岳』  
岩波書店 1930(昭和5)年刊行=2刷

当時、国内の登山愛好家に人気となった白馬岳の自然や山名由来等について解説。アプローチを含めた山頂までのコース案内のほか、付録として巻末に登山日程として登山ルート行程や登山心得として装備や注意点が記載されたガイドブックです。



Ⅲ4-7 矢澤米三郎 著『信濃郷土叢書 第九編 信濃天然記念物』  
信濃郷土文化普及會 1929(昭和4)年刊行

同シリーズ本のうち矢澤が担当した本書では、自身による図や写真を挿入し、ライチョウやニホンカモシカ、コマクサなどの高山植物や高山蝶などを含め、県内の天然記念物に指定もしくは指定にふさわしい動物や史跡名勝などを解説しています。





Ⅲ4-8 矢澤米三郎 著『日本アルプスの研究』  
三省堂 1935(昭和10)年刊行

扉と函には「信濃山岳會會長 矢澤米三郎著」と記載され、そうした肩書によって上梓した本書は、高山の自然科学に関する学術研究を一冊にまとめたもので、矢澤が長年にわたり取り組んできた成果が凝縮されています。



Ⅲ4-9・10 《参考展示》ライチョウ剥製【上・下写真】  
大町市立美麻小中学校蔵

この2つのライチョウの剥製は美麻小中学校の理科室の棚に一对で保管されていた標本です。片方《上の写真》はメスの成鳥1羽に2羽のヒナが付随し、もう片方《下の写真》は成鳥1羽です。いずれの台座にもラベルが貼付されています。ラベルの記載文字は経年劣化による摩耗やインクの退色などで鮮明には残っていませんが、部分的に読み取ることができます。「美麻□(「北」か)学校」と印刷されたラベルには、科名や学名とともに「和名 らいてう」「産地 日本北アルプス」と記載されています。標本からは来歴等を含め、詳細な情報はこれ以上確認できませんが、旧美麻村内の各学校が統合されて美麻南、美麻北の両尋常小学校2校が開設されたのが1925(大正14)年ですので、台座に残るラベルの校名印字が「美麻北」とするこのラベルが貼付されたのはそれ以降となり、標本の作製もそれ以降かその前後頃と推測されます。

明治・大正時代以降、学校教材用の剥製標本として北アルプスなどで捕獲されたライチョウが山麓の地元地域だけではなく全国的にも広く取り引きされていたものと考えられます。



Ⅲ4-11 《参考展示》信濃教育會 編『尋常小學校 理科學習帳 六年用』  
光風館書店 1929(昭和4)年刊行=訂正4版  
大町市立大町西小学校蔵  
※右は「雷鳥の保護色」という図が挿入された頁

昭和初期、大町尋常高等小学校時代に使われた理科の小学6年生用の学習帳です。奥付によると、初版は1922(大正11)年の発行となっています。この中で「動物の生活」という項目では、動物の食べ物や体のつくりなどについて解説されています。挿入された図のなかには「雷鳥の保護色」という題名の図があり、ヒナを連れた夏羽の成鳥のライチョウと冬羽の成鳥の2羽のライチョウが一對で描かれ、夏と冬の羽の色の違いが示されています《右の写真》。当時の理科で、高山の象徴とされるライチョウについて子どもたちが学んでいたことがうかがえます。

#### 保科百助(五無齋)



Ⅲ5-1 保科百助蒐集 長野縣地學標本

大町市立大町西小学校蔵 ※右は木製収納箱の扉部分の表側

保科が採集した岩石・鉱物による地学標本。木製収納箱入。木箱の扉部分には表に「理學士瀧本鏡三先生校閱／保科百助蒐集／長野縣地學標本」《右の写真》、裏に「明治三十六年十月／保科百助獻納」と墨書されています。箱内部には9段の引き出しがあり、各段に紙製小箱に入った岩石・鉱物が収納されています。現在、この箱の中に確認できる標本の点数は破片を含めて約180点です。

大町尋常高等小学校時代に寄贈されたこの標本は、1901(明治34)年の保科自身第1回目となる地学標本採集の旅で集めた岩石・鉱物を整え、1903(明治36)年に長野県下の各種学校に頒布した100組余の地学標本のひとつです。収納箱の扉に記された通り、標本の同定は東京帝国大学地質学科学卒の研究者・瀧本鏡三に依頼したものと推測されます。瀧本は、とくに国産鉱物の形態的研究においては当時の第一人者といわれる人物でした。

この地学標本は、頒布当時などの目録によると収納された岩石・鉱物等の点数は1組200点を超えるとされ、その一覧には白馬岳などの北アルプスや現在の市内各地で採集されたものも複数含まれています。100年以上の時を経て現存する保科頒布の地学標本は限られますが、県内の各種学校に今も残されています。大町市・北安曇郡の大北地域内の小中学校において、その所蔵が確認されているのは、これまでに大町西小学校に残されたこの1組のみです。この標本は、現在までに理科教材としての利用をほぼ終えています。明治期の信州における理科教育の広まりを今に伝える歴史的価値を有した貴重な品です。

志村 寛 (烏嶺)



III 6-1 志村寛・前田次郎 共著『やま』 橋南堂 1907 (明治40) 年刊行  
北アルプスを中心に八ヶ岳や富士山などを含めた1906 (明治39) 年までの志村と前田の両者による登山記で構成されており、志村の白馬岳登山の紀行文も収められています。ハンドブックとしての携帯性を考慮してか、ホック留めの装丁が奇抜です。



III 6-2 志村寛 著『高山植物採集及培養法』 成美堂書店 1909 (明治42) 年刊行

巻頭には高山植物の写真のほか白馬岳周辺の山岳写真が挿入され、はじめに高山植物について総論的にふれた後、その培養方法及び採集ならびに保存方法について具体的かつ詳細に解説しています。巻末には高山植物の産地および植物目録が付されています。



III 6-3 志村寛 著『千山萬岳』 嵩山房 1913 (大正2) 年刊行

志村による1907 (明治40) 年以降の登山記と論文で構成されています。巻頭には本書の刊行にあたり寄稿されたウェストンによる序文が掲載されています。



III 6-4 志村寛専用の植物専用ラベル

標本の学術的な価値を決める上で最も重要な標本ラベル。未使用のものが束で残る志村旧蔵の標本ラベルには一般的なものと同様に、タイトルに植物 (草本) 学者 (Herb.=Herbalist) ・志村寛という標本の所有者名など (Herb. Hiroshi Shimura. TOKYO JAPAN) が印刷され、その右下に標本番号 (No) 欄が印刷され、学名などを書き込む余白の下には、和名 (Japanese name)、採集地 (Locality)、採集年月日 (Date)、採集者名 (Collector) の欄が印刷されています。

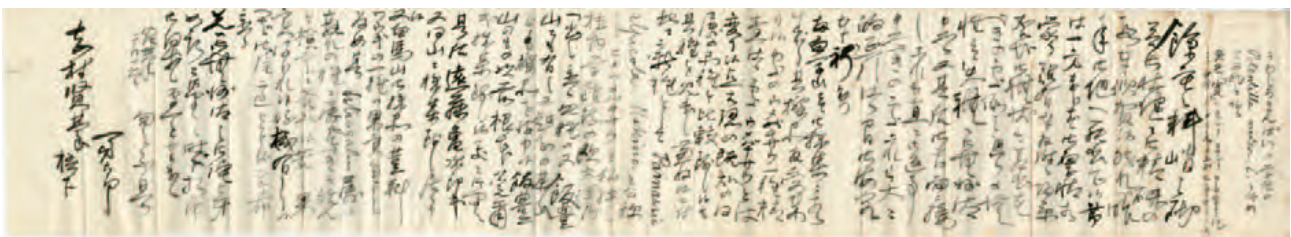


III 6-5 志村寛採集の植物腊葉標本 ヒメウメバチソウ (ニシキギ科)

1904 (明治37) 年8月、志村は自身第1回目となる白馬岳登山において、新種の高山植物2種、ヒメウメバチソウとシロウマオウギを葱平付近で採集しました。この腊葉標本は志村採集によるもので、台紙には「志村発見新種/白馬葱平/ヒメウメバチサウ」と鉛筆による添え書きが残ります。

III 6-6 志村寛宛 牧野富太郎筆の書簡 1905 (明治38) 年【下写真】

巻紙の和紙に毛筆書きされた2月16日付の一通。高山植物の新種2種の確認につながる当時の様子を伝える書簡です。  
書簡の内容は、当時、帝国大学理科大学の助手であった植物学者・牧野が受け取った白馬岳採集の植物標本同定に関した志村への連絡など。ここでは、ウメバチソウの一種について、新種として学名とともに和名ヒメウメバチソウと称して『植物学雑誌』へ投稿したと伝えています。また、オウギの一種について、果実がないため同定が難しく、もし果実を採集できる機会があればご注意願いたいとも伝えています。  
牧野が受け取った標本というのは、前年1904 (明治37) 年8月に志村が自身第1回目となる白馬岳登山で葱平付近において採集したヒメウメバチソウとシロウマオウギの2種の植物腊葉標本のことです。これらを志村は牧野の元へ送って同定を依頼していました。この書簡で同定困難との連絡を受けたオウギの一種は、その後、新種であることが確認されたシロウマオウギです。新種と確認された両種とも、牧野によってそれぞれ和名が命名されています。





# 展示資料目録 (実物資料)

ここに挙げた資料は、展示資料のうち、展示パネルに挿入した図版資料(写真・図表等)を除く実物資料である。  
 なお、所蔵者の明記がない資料は全て当館蔵。

## 第3章 信州理科教育のさきがけ — 博物学の士々群像 —

### 渡邊 敏

No.	展示実物資料名	備考	寸法 (cm)
Ⅲ1-1	渡邊敏記恩碑の拓本(額装)	大町市立大町西小学校蔵	L205.0×W102.0×T4.0
Ⅲ1-2	渡邊敏筆の書(軸装)	大町市立大町西小学校蔵	L201.0×W57.2×T2.7
Ⅲ1-3	渡邊敏筆の書(軸装)	大町市立大町西小学校蔵	L167.5×W53.8×T2.5
Ⅲ1-4	窪田畔大筆『郡治日録』写し	8冊 (1879(明治12)~1886(明治19)年) 一般社団法人北安曇教育会蔵	各冊L13×W18×T0.6~1.0

### 田中阿歌麿

No.	展示実物資料名	備考	寸法 (cm)
Ⅲ2-1	田中阿歌麿 著『日本北アルプス湖沼の研究』	信濃教育會北安曇部會 1930(昭和5)年刊行	L23.0×W16.0×T6.5
Ⅲ2-2	田中阿歌麿 著『湖沼めぐり』	博文館 1925(大正14)年刊行=10版	L15.8×W10.5×T2.5

### 河野齡蔵

No.	展示実物資料名	備考	寸法 (cm)
Ⅲ3-1	河野齡蔵使用の山高帽	白馬村教育委員会蔵(白馬村歴史民俗資料館展示)	L31×W23×H14
Ⅲ3-2	河野齡蔵採集の植物腊葉標本 ヒメツルコケモモ(ツツジ科)	白馬村教育委員会蔵 (白馬村歴史民俗資料館展示)	額L43×W35×T1
Ⅲ3-3	河野齡蔵使用の名刺		L10.0×W6.1
Ⅲ3-4	河野齡蔵 著『高山研究』	岩波書店 1927(昭和2)年刊行	L22.5×W15.8×T2.2
Ⅲ3-5	河野齡蔵 著『信濃郷土叢書 第十編 日本アルプス』	信濃郷土文化普及會 1929(昭和4)年刊行	L18.5×W13.0×T0.4
Ⅲ3-6	河野齡蔵 著『日本高山植物圖説』	朋文堂 1931(昭和6)年刊行=第3版	L23×W16.3×T3.0

### 矢澤米三郎

No.	展示実物資料名	備考	寸法 (cm)
Ⅲ4-1	矢澤米三郎・河野齡蔵 共著『日本アルプス登山案内』	岩波書店 1916(大正5)年刊行=初版	L16.5×W9.8×T1.9
Ⅲ4-2	矢澤米三郎・河野齡蔵 共著『日本アルプス登山案内』	岩波書店 1917(大正6)年刊行=4版	L16.6×W9.9×T2.0
Ⅲ4-3	矢澤米三郎・河野齡蔵 共著『日本アルプス登山案内』	岩波書店 1923(大正12)年刊行=11版	L16.6×W9.8×T2.0
Ⅲ4-4	矢澤米三郎 著『上高地』	岩波書店 1928(昭和3)年刊行	L19.8×W13.5×T1.5
Ⅲ4-5	矢澤米三郎 著『雷鳥』	岩波書店 1929(昭和4)年刊行=1刷	L19.8×W13.8×T1.9
Ⅲ4-6	矢澤米三郎 著『白馬岳』	岩波書店 1930(昭和5)年刊行=2刷	L16.5×W9.3×T1.0
Ⅲ4-7	矢澤米三郎 著『信濃郷土叢書 第九編 信濃天然記念物』	信濃郷土文化普及會 1929(昭和4)年刊行	L18.8×W12.8×T0.6
Ⅲ4-8	矢澤米三郎 著『日本アルプスの研究』	三省堂 1935(昭和10)年刊行	L23.8×W16.0×T2.8
Ⅲ4-9	《参考展示》ライチョウ剥製	大町市立美麻小中学校蔵 ※メスの成鳥1羽とヒナ2羽	L24.0×W21.2×H20.8(台座含む)
Ⅲ4-10	《参考展示》ライチョウ剥製	大町市立美麻小中学校蔵 ※成鳥1羽	L24.5×W13.5×H22.3(台座含む)
Ⅲ4-11	《参考展示》信濃教育會 編『尋常小學 理科學習帳 六年用』	光風館書店 1929(昭和4)年刊行=訂正4版 大町市立大町西小学校蔵	L22.1×W15.1×T0.7

### 保科百助 (五無齋)

No.	展示実物資料名	備考	寸法 (cm)
Ⅲ5-1	保科百助蒐集 長野縣地學標本	大町市立大町西小学校蔵	L40.6×W41.4×H66.4

### 志村 寛 (烏嶺)

No.	展示実物資料名	備考	寸法 (cm)
Ⅲ6-1	志村寛・前田次郎 共著『やま』	橋南堂 1907(明治40)年刊行	L19.0×W13.0×T4.5
Ⅲ6-2	志村寛 著『高山植物採集及培養法』	成美堂書店 1909(明治42)年刊行	L19.6×W13.0×T1.6
Ⅲ6-3	志村寛 著『千山萬岳』	嵩山房 1913(大正2)年刊行	L23.5×W15.5×T3.0
Ⅲ6-4	志村寛専用の植物専用ラベル		1束L12.0×W8.0×T4.0
Ⅲ6-5	志村寛採集の植物腊葉標本 ヒメウメバチソウ(ニシキギ科)		台紙L27×W18.8
Ⅲ6-6	志村寛宛 牧野富太郎筆の書簡	1905(明治38)年	L102.5×W18.2

# 博物学と登山 関係略年表

西暦	和暦	事 項	備 考
1847年	弘化4年	渡邊敏、陸奥国岩代安達郡二本松（現福島県二本松市）で二本松藩士の浅岡家に生まれる。後に渡邊家へ養子に入る。	1854（安政元）年、アルフレッド・ウィルス、ヴェッターホルン登山（「アルピニズム」「（アルプスにおける）近代登山」のはじまりとされる）。日米和親条約（神奈川条約）。
1865年	慶応元年	河野齡藏、東筑摩郡島内村犬飼新田（現松本市島内）の庄屋・河野通重の四男として生まれる。	
1868年	慶応4年または明治元年	矢澤米三郎、諏訪郡上金子村（現諏訪市大字中洲）の寺子屋師匠・矢澤正雄の長男として生まれる。	1867（慶応3）、大政奉還。王政復古の大号令。
1868年	明治元年	保科百助、北佐久郡山部村（後に横鳥村、現立科町）に生まれる。	1868（明治元）年、明治維新（五箇条の御誓文、明治改元）。
1869年	明治2年	田中阿歌磨、東京に生まれる。	
1874年	明治7年	志村寛（鳥嶺）、栃木県那須郡烏山町（現那須烏山市）に生まれる。	
1875年	明治8年	渡邊敏、東京師範学校（後に東京高等師範学校。現筑波大学の前身のひとつ）卒業。同年、仁科学校（後の大町尋常高等小学校、大町小学校。現大町市立大町西小学校）へ訓導として招聘され、校長職を引き継ぐ。	
1879年	明治12年	窪田畔夫、北安曇郡長拝命。以降、1886（明治19）年の辞職まで8年間在職。	
1883年	明治16年	8月、渡邊敏、北安曇郡長・窪田畔夫、北城小学校長（現白馬村立白馬北小学校）・豊島三男人、同校訓導・加納直貫のほか山案内の狐師など総勢9人が白馬岳登山（近代登山者として初めての白馬岳登山）。	
1884年	明治17年	9月、渡邊敏、北安曇郡長・窪田畔夫、烏帽子・鷺羽連峰方面などへ縦走登山。渡邊敏、仁科学校長を辞す。	
1889年	明治22年	河野齡藏、長野県尋常師範学校（後に長野師範学校。現信州大学教育学部の前身のひとつ）卒業。	1889（明治22）年、大日本帝国憲法発布。
1890年	明治23年	河野齡藏、大町にあった郡立の北安曇高等小学校に訓導として赴任（～1892（明治25）年）。	
1891年	明治24年	保科百助（五無齋）、長野県尋常師範学校卒業。	
1893年	明治26年	矢澤米三郎、長野県尋常師範学校を経て、同年に東京高等師範学校博物科卒業。河野齡藏、初めて高山での植物採集を乗鞍岳で試みる。	1894（明治27）年、志賀重昂、『日本風景論』刊行。1894（明治27）～1895（明治28）年、日清戦争。
1895年	明治28年	保科百助、武石村下本入（現上田市武石下本入）産の緑巖石を発見。同年、浦里村越戸（現上田市北西部および青木村大字当郷）産の玄能石を発見。	
1896年	明治29年	渡邊敏、長野高等小学校内に新設された長野高等女学校（後に移転。現長野西高等女学校）の初代校長に就任。	
1897年	明治30年	河野齡藏、大町小学校（現大町市立大町西小学校）に訓導兼校長として迎えられる（～1901（明治34）年）。	
1898年	明治31年	河野齡藏、自身第1回目となる白馬岳登山。七貴尋常高等小学校（現安曇野市立明南小学校）の訓導・松岡邦松（後に岡田姓）、北城尋常高等小学校（現白馬村立白馬北小学校）の校長・吉沢秀吉（旧姓沢山）が同行。この登山は高山植物採集を目的とした学術的なもので、博物学者が白馬岳に登山した最初となった。矢澤米三郎、この年から2年間を東京高等師範学校研究科に学んだ後、長野県師範学校の教諭となる。以降、同校の同窓であった河野齡藏らと乗鞍岳や白馬岳、八ヶ岳など国内の高山を舞台にした学術研究に邁進。	
1900年	明治33年	保科百助、蓼科高等小学校ならびに蓼科実業補習学校（現蓼科高等学校）の校長として郷里へ赴任。	1900（明治33）年、「日本博物学会」（のちに日本博物学会同志会）結成。
1901年	明治34年	保科百助、教職を自辞。同年、第1回目となる長野県下漫遊の地学標本採集へ旅立つ。	
1902年	明治35年	渡邊敏、長野高等女学校生徒を自ら引率して2泊3日の戸隠山登山を実施。以後、同校での学校集団登山は毎年秋の恒例行事として十数年間実施され、渡邊は戸隠山や飯綱山（飯綱山）といった北信五岳などへ生徒を引率して登山。矢澤米三郎や河野齡藏ら長野県師範学校卒業の同志らが集まり「信濃博物学会」が設立。矢澤は幹事長を務める。	1902（明治35）年、日英同盟成立。
1903年	明治36年	保科百助、100組の長野県地学標本を県下の各学校に頒布するとともに、各地で地学の講演会を行う。志村寛、長野県立長野中学校（現長野高等学校）へ博物科（兼地理）教師として赴任。	
1904年	明治37年	河野齡藏、矢澤米三郎とともに赤石岳など八ヶ岳に登り、「ヒナリンドウ」を発見。8月、志村寛、自身第1回目となる白馬岳登山。このとき葱平付近で採集したヒメウメバチソウとシロウマオウギの高山植物2種が後に新種と確認される。	1904（明治37）～1905（明治38）年、日露戦争。
1905年	明治38年	矢澤米三郎、長野県師範学校女子部を分離して設置された長野県松本女子師範学校に初代校長として就任。読売新聞の紙上で募集した「奇人百種」で「保科五無齋」の紹介投稿文が「第一等」として掲載される。8月、志村寛、前田曙山（本名次郎）が同行した自身第2回目の白馬岳登山をするが、暴風雨に遭い、登頂を断念して途中下山。同月、自身第3回目となる白馬岳登山。	1905（明治38）年、東洋における最初の山岳団体として「山岳会」（後に日本山岳会）結成。同会は、小島鳥水（本名久太）ら7人の有志によって立ち上げられた組織で、設立当時は日本博物学会同志会内の支会として発足。
1907年	明治40年	8月、田中阿歌磨、諏訪湖と野尻湖での調査を始める。その前後から北アルプス周辺地域の湖沼として、まず初めに大町市の仁科三湖（青木・中綱・木崎湖）の調査を行う。それ以降、20余年にわたり、高山湖沼の調査・研究を重ねる。信濃教育会による「信濃図書館」設立。保科百助はその設立に際し、同館設立係員として尽力して自身の所有する蔵書一切を寄贈。測量用の石室跡を整備した白馬頂上小屋（白馬山荘の前身）は、石積みで外壁側面などを補強した木造小屋を石室跡地に新設して本格的に開業し、北アルプスの近代登山者向け営業山小屋の最初となる。志村寛、前田次郎と共著による『やま』刊行。	
1909年	明治42年	保科百助、第2回目となる地学標本採集の旅に出る。志村寛、『高山植物採集及培養法』刊行。	1910（明治43）年、韓国併合。加賀正太郎、ユングフラウ登山（日本人初のアルプス4,000m峰登頂）。



西暦	和暦	事 項	備 考
1911年	明治44年	保科百助、逝去。 信濃博物学会の姉妹団体として「信濃山岳研究会」が結成。会長に矢澤、副会長に河野が就く。同会発足に際し、松本女子師範学校を会場に8月の3日間にわたり、山岳に関する各種講演が行われたほか、校内の5部屋を展示室にして、山岳写真・絵画・図書、高山植物や動物の標本、鉢植えの高山植物などの品々が展示される。	
1912年	明治45年	五無斎保科百助碑が北佐久郡立科町の津金寺に建立される。	
1913年	大正2年	馬場治三郎が北城尋常高等小学校（現白馬村立白馬北小学校）嶺分教場の訓導として赴任。以降、馬場が同校に在籍した昭和初期まで、馬場の提案により校舎内に設けられた「高山館」という一室では、白馬岳に関する自然科学の各分野の標本や写真、模型などを展示。さらに内庭にはロックガーデン風の高山植物園が設けられる。 河野齡蔵、南アルプスの荒川岳に登山し、「スルガヒョウタンボク」などを発見。五無斎保科百助碑が長野市の加茂神社に建立される。 志村寛、『千山萬岳』刊行。ウォルター・ウェストン直筆による序文の原稿が掲載される。	1913（大正2）年、数十年間の測量と製図作業をへて、この年から陸地測量部の北アルプス部分の5万分の1地形図が順次発売。文部省（当時）が「学校体操教授要目」を公布。  1914（大正3）年、第一次世界大戦起り、ドイツに宣戦。
1915年	大正4年	信濃鉄道が北松本・豊科間で開業。以後、北方へ延伸。	
1916年	大正5年	信濃鉄道が大町まで開通。 矢澤米三郎・河野齡蔵、『日本アルプス登山案内』刊行。 志村寛、12年余りの長野中学校での勤務を終え、台湾へ渡って台中の中学校へ赴任。	
1917年	大正6年	渡邊敏、70歳で白馬岳に再度登山。 木崎湖畔の信濃公堂を会場に日本初の夏期大学として「信濃木崎夏期大学」開講。 田中阿歌麿、第1回信濃木崎夏期大学で「湖沼物理学」の演題で講演。 登山道整備や山小屋建設、山案内人の養成、自然保護などを目的に設立された組織「日本アルプス会」設立。総裁に松本市出身の教育者・沢柳政太郎が就く。	1917（大正6）年、箆川谷大沢出合対岸に石積み置き屋根の大沢石室がつくられる。大天井岳と東大天井岳間、二ノ俣分岐に、実業家・丸山盛一（安曇野市豊科出身）の寄付金をもとに南安曇教育会が二ノ俣石室をつくる。
1918年	大正7年	松岡邦松が書いた「白馬岳」と題する作文が尋常小学校6年生用の国語読本に採用。この白馬岳を紹介した作文が掲載された国語読本は1941（昭和16）年に国民学校へ切りかわるまで使用される。 田中阿歌麿、第2回信濃木崎夏期大学で「一般的湖沼学」の演題で講演。 田中阿歌麿、『湖沼めぐり』刊行。	
1919年	大正8年	信濃博物学会と信濃山岳研究会の両団体を母体として「信濃山岳会」が設立。正副会長に矢澤米三郎と河野齡蔵、幹事長に牧伊三郎が就く。 大町小学校（現大町市立大町西小学校）、白馬岳登山。	1919（大正8）年、長野県は県内10ヶ所に石室を設置する方針を決定。堀金尋常高等小学校（現安曇野市立堀金小学校）校長・佐藤嘉市が結成した常念岳研究会が前常念岳に石室を建設。
1920年	大正9年	7月、田中阿歌麿、携帯式の帆布製ボートなどを運び上げて白馬大池で湖沼調査。	
1921年	大正10年	大町尋常高等小学校（後に移転。現大町市立大町西小学校）に建立された渡邊敏記念碑の序幕式に渡邊が夫妻で招かれ出席。	1921（大正10）年、横有恒、スイス・アルプスのアイガー・東山稜初登攀。イギリス隊、エベレストへの遠征登山をはじめめる。
1922年	大正11年	河野齡蔵、諏訪高等女学校（現諏訪二葉高等学校）校長に就任。 志村寛、台湾から帰国後、長年にわたる教職を辞す。 信濃教育會編による『尋常小學校 理科學習帳 六年用』刊行。	1923（大正12）年、関東大震災。
1924年	大正13年	河野齡蔵、諏訪高等女学校長を辞し、松本の自宅に帰る。その後、松本第二中学校（現松本県ヶ丘高等学校）で嘱託の教諭を務めることになり教職を続ける。	
1927年	昭和2年	河野齡蔵、『高山研究』刊行。	
1928年	昭和3年	上高地、国の名勝および天然記念物に指定。 矢澤米三郎、『上高地』刊行。	
1929年	昭和4年	河野齡蔵、『信濃郷土叢書 第十編 日本アルプス』刊行。 矢澤米三郎、『雷鳥』刊行。 矢澤米三郎、『信濃郷土叢書 第九編 信濃天然記念物』刊行。	
1930年	昭和5年	渡邊敏、逝去。 田中阿歌麿、『日本北アルプス湖沼の研究』刊行。 矢澤米三郎、『白馬岳』刊行。	
1931年	昭和6年	長野高等女学校（現長野西高等学校）に渡邊敏銅像が建立される。その後、日中戦争・太平洋戦争時に供出されるが、1996（平成8）年に再建立。 河野齡蔵、松本第二中学校の嘱託を解かれ、半世紀にわたる教員生活を終える。 河野齡蔵、『日本高山植物圖説』刊行。	1931（昭和6）年、満州事変起こる。
1933年	昭和8年	河野齡蔵、信濃教育会の委嘱により、寒地植物研究のため札幌を経て樺太に渡り、現地の山岳やツンドラ地帯を調査。	
1934年	昭和9年	北アルプス一帯、中部山岳国立公園に指定。	
1935年	昭和10年	矢澤米三郎、『日本アルプスの研究』刊行。	1936（昭和11）年、立教大学山岳部、ナンダ・コート初登頂（日本人初のヒマラヤ遠征登山）。
1939年	昭和14年	河野齡蔵、逝去。	1937（昭和12）～1945（昭和20）年、日中戦争。
1942年	昭和17年	矢澤米三郎、逝去。	1941（昭和16）～1945（昭和20）年、太平洋戦争。
1944年	昭和19年	田中阿歌麿、逝去。	1946（昭和21）年、日本国憲法公布。
1952年	昭和27年	上高地、国の特別名勝及び特別天然記念物に指定。 白馬連山高山植物帯、国の特別天然記念物に指定。	1953（昭和28）年、イギリス隊、エベレスト初登頂。
1956年	昭和31年	志村寛、83歳にして13回目、最後の白馬岳登山。この折、大町山岳博物館に來館。	1956（昭和31）年、国際連合加盟成る。日本山岳会、マナスル初登頂（「戦後の登山ブーム」へ）。
1961年	昭和36年	志村寛、逝去。	

注 ここでは、後立山連峰を中心とした北アルプスにおける博物学と登山に関して、本展でとりあげた人物にまつわる主な出来事などを記した。備考欄には同時代の出来事から関係する主な事項などを参考までに記した。この年表は、市立大町山岳博物館編『市立大町山岳博物館 常設展「北アルプスの自然と人」山と人 北アルプスと人のかかわり一人文学系 展示解説書一』（市立大町山岳博物館、2014）掲載の「北アルプスと人のかかわり年代記（北アルプス山岳文化史略年表）」を含め、別掲の文献を参考にして作成した。

# 主要参考文献

(全体共通)

市立大町山岳博物館編『山と人 北アルプスと人とのかわり — 人文科学系 展示解説書 —』(市立大町山岳博物館、2014)

## 第1章 博物学と登山

新村出編『広辞苑』第4版第1刷(岩波書店、1991)

飯田市美術博物館編『江戸時代の好奇心 — 信州飯田・市岡家の本草学と多彩な教養 —』(飯田市美術博物館、2004)

長野県立歴史館編『平成二九年度冬季展 田中芳男 — 「虫捕御用」の明治維新 図録』(長野県立歴史館、2017)

富山県[立山博物館]編『富山県[立山博物館] 令和元年度特別企画展 かがやく天産物 — 時代を越える立山ブランドを求めて —』(富山県[立山博物館]、2019)

B・H・チェンバレン/W・B・メイスン共編『日本旅行案内』第7版(ジョン・マレー社、1907)

Walter Weston著『OF THE ORIGIN OF THE TERM "THE JAPANESE ALPS."』『山岳』第13年第2号(日本山岳會事務所、1919)

岩間正夫編『世界山岳百科事典』(山と溪谷社、1971)

ヴィクター・ハリス/後藤和雄編『WILLIAM GOWLAND THE FATHER OF JAPANESE ARCHAEOLOGY ガウランド 日本考古学の父』(大英博物館出版部・朝日新聞社、2003)

イアン・C.ラックストーン著/長岡祥三・関口英男訳『東西交流草書10 アーネスト・サトウの生涯 — その日記と手紙より —』(雄松堂出版、2003)

関悟志著『山博ゼミ41・42 明治前後の外国人登山者(前・後)』(2003年12月13日・20日付「大糸タイムス」)

『目で見る日本登山史』(山と溪谷社、2005)

造幣局あゆみ編集委員会編『造幣局のあゆみ 改訂版』(独立行政法人造幣局、2010)

## 第2章 大正登山ブーム — 近代登山の隆盛 —

大町市史編纂委員会編『大町市史』第4巻近代・現代(大町市、1985)

柳原修一著『北アルプス山小屋物語』(東京新聞出版局、1999=第4刷)

菊地俊朗著『北アルプス この百年』(文藝春秋、2003)

菊地俊朗著『白馬岳の百年 近代登山発祥の地と最初の山小屋』(山と溪谷社、2005)

市立大町山岳博物館編『北アルプスの自然と人 市立大町山岳博物館展示案内』(市立大町山岳博物館、2005)

関悟志著『山博ゼミ97・98 高い山、低い山 — 山の高さいろいろ(上・下)』(2005年12月24日・2006年1月14日付「大糸タイムス」)

大町市教育委員会編『ふるさときのう・きょう・あした — わたしたちの大町 —』新訂第4版(大町市教育委員会、2015)

市立大町山岳博物館・大町登山案内人組合創立100周年記念事業実行委員会編『北アルプスの百年 百瀬慎太郎と登山案内人たち』(市立大町山岳博物館、2017)

長野県立歴史館編『信濃の風土と歴史② 山』(長野県立歴史館、2016)

谷口美波著『近代における集団登山の始まり — 山岳地域の学校登山の事例を中心に —』『関西学院大学地理学卒業論文集』第43号(関西学院大学文学部文化歴史学科地理学地域文化学研究室、2015)

徳田光治・寺崎誠一・日置二郎共著『「山の学校」と「槍ヶ岳」 — その歴史と課題 —』『成城学園教育研究所研究年報』第38集(成城学園教育研究所、2017)

信濃毎日新聞社出版部編『長野県スポーツ史』(信濃毎日新聞社、1979)

『昭和48年度 登山資料(学校編)』(長野県山岳総合センター、1974)

菊地俊朗著『展望台 衰退する学校登山』(2018年2月17日付「松本平タウン情報」)

## 第3章 信州理科教育のさきがけ — 博物学の士々群像 —

### 渡邊 敏

小林計一郎著『渡邊敏先生傳』(小林計一郎、1951)

長沢武著『北アルプス夜話』(信濃路、1977)

信濃毎日新聞社出版部編『長野県スポーツ史』(信濃毎日新聞社、1979)

朝日新聞松本支局著『秘録・北アルプス物語』(郷土出版社、1982)

佐藤貢著『北アルプス登山の夜明け』『信濃路 第42号 信州の美と宝 ⑤大町・北アルプス』(信濃路出版、1983)

大町市史編纂委員会編『大町市史』第五巻 民俗・観光(大町市、1984)

大町市史編纂委員会編『大町市史』第四巻 近代・現代(大町市、1985)

長沢武著『北アルプス白馬連峰 — その歴史と民俗』(郷土出版社、1986)

渡邊敏全集編集委員会編『渡邊敏全集』(長野市教育会、1987)

水本徳明著『長野尋常小学校を中心とする校長渡邊敏の学校経営 — 明治後期における学校経営の課題と構造に関する事例研究 —』日本教育経営学会編『日本教育経営学会紀要』第38号(日本教育経営学会、1996)

荒井和比古著『一幅の掛軸をめぐる — 渡邊敏と白馬岳 —』『第13回山小屋カルチャー報告書』(早稲田大学岳友会、2004)

『目で見る日本登山史』(山と溪谷社、2005)

富山県[立山博物館]編『富山県[立山博物館] 平成17年度特別企画展 ちょっと昔の学校登山 — 写真でたどる大正・昭和の立山登山 —』(富山県[立山博物館]、2005)

市立大町山岳博物館編『北アルプス登山史資料2 — 白馬岳周辺登山史 —』(市立大町山岳博物館、2012)

関悟志著『「顕彰碑にみる人物登山史」シリーズ 第3回 渡邊敏』日本山岳文化学会登山史分科会編『登山史分科会レポート』No.12(日本山岳文化学会登山史分科会、2013)

菊地俊朗著『展望台 信州教育の傑作』(2013年8月10日付「松本平タウン情報」)

菊地俊朗著『展望台 女性の登山服』(2015年8月4日付「松本平タウン情報」)

荒井今朝一著『信濃大町の歴史と風土 第十三回 信濃大町学問ことはじめ』『育てる会』575号(育てる会、2016)

刑部芳則著『明治時代の高等女学校と服装論議 — 女子生徒の着袴 —』大倉精神文化研究所編『大倉山論集』第64輯(大倉精神文化研究所、2018)

『渡邊敏と保科百助 2018-01-12』「見学体験日記」<https://kengaku5.hatenablog.com/entry/36004932>(最終閲覧2020年5月8日)

### 田中阿歌磨

田中阿歌磨著『湖沼の研究』(新潮社、1911)

田中阿歌磨著『日本アルプス山下の湖光』『武俠世界 臨時増刊 第7巻 第10号 登山探検畫報』(武俠世界社、1918)

田中阿歌磨談『北アルプスの湖沼調査』(大正八年八月二十八日新愛知)『山岳』第14年第1号(日本山岳會、1920)

田中阿歌磨著『日本北アルプス湖沼の研究』(信濃教育會北安曇部會、1930)

田中薫著『館を訪れて — 大町と私 —』大町山岳博物館編『山と博物館』第6巻第12号(大町山岳博物館、1961)

百瀬慎太郎遺稿集刊行会編『山を想へば』(百瀬慎太郎遺稿集刊行会、1962)

大谷定雄著『山岳名著選集 北アルプス白馬讃歌 — 山案内60年の回想 —』(ベースボール・マガジン社、1982)

大町市史編纂委員会編『大町市史』第五巻 民俗・観光(大町市、1984)

『目で見る日本登山史』(山と溪谷社、2005)

赤澤寛著『木崎湖は學術的自然遺産』市立大町山岳博物館編『山と博物館』第58巻第12号(市立大町山岳博物館、2013)



## 河野齡蔵

- 福岡孝行著「白馬(しろうま)岳100年」『山と博物館』No.19(大町山岳博物館、1957)  
編集部著「河野齡蔵先生 山でつくられた郷土の科学者」『山と博物館』No.23(大町山岳博物館、1957)  
長沢武者「河野齡蔵と信州理科教育」大町山岳博物館編『山と博物館』第31巻第6号(大町山岳博物館、1986)  
東京都写真美術館企画・監修『山を愛する写真家たち 日本山岳写真の系譜』(日本写真企画、1999)  
菊地俊朗著「北アルプス この百年」(文藝春秋、2003)  
菊地俊朗著「白馬岳の百年 近代登山発祥の地と最初の山小屋」(山と溪谷社、2005)  
『目で見る日本登山史』(山と溪谷社、2005)  
小松芳郎著「脚光 歴史を彩った郷土の人々 48 河野齡蔵」(2012年2月14日付「市民タイムス」)  
菊地俊朗著「展望台 河野齡蔵の功績」(2013年3月12日付「松本平タウン情報」)  
松田貴子・桜井智子共著「松本市市と自然博物館に収蔵されている植物標本の概要」長野県植物研究会編『長野県植物研究会誌』第47号(長野県植物研究会、2014)  
松本市立博物館編「生誕150周年記念特別展「河野齡蔵 ～博物学者のProfile～」」(松本市立博物館、2015)  
松田貴子・小原稔共著「河野齡蔵の植物調査、植物標本および執筆物に関する資料調査報告」信濃史学会編『信濃』第71巻第10号(信濃史学会、2019)  
《コラム》活躍する先生たち ― 国語読本の「白馬岳」と松岡邦松、高山館と馬場治三郎 ―  
長沢武者「北アルプス夜話」(信濃路、1977)  
長沢武者「河野齡蔵と信州理科教育」大町山岳博物館編『山と博物館』第31巻第6号(大町山岳博物館、1986)  
長沢武者「北アルプス白馬連峰 ― その歴史と民俗」(郷土出版社、1986)  
菊地俊朗著「北アルプス この百年」(文藝春秋、2003)  
菊地俊朗著「白馬岳の百年 近代登山発祥の地と最初の山小屋」(山と溪谷社、2005)  
《コラム》博物館や学校が所蔵する標本の価値  
河合久仁子著「博物館標本から読み解かれるもの」「一人の採集人が遺したもの～アメリカ・スミソニアン協会国立自然史博物館と大町市のつながり～」  
市立大町山岳博物館編『山と博物館』第57巻第10号(市立大町山岳博物館、2012)  
『平成30年度岐阜県博物館特別展図録「理科室からふるさとの自然を見つめて～知れば知るほど面白い標本の世界～」(岐阜県博物館、2018)  
『特集 DNAと保存科学で生物標本を活かす』『milsl 自然と科学の情報誌 [ミルシル]』第12巻第2号(国立科学博物館、2019)  
『ニホンライチョウかつての分布域は 信大の「標本」北大の研究者が調査』(2019年7月31日付「信濃毎日新聞」)  
『駒ヶ根のニホンライチョウ剥製 北アの集団に近いと判明 遺伝子解析』(2019年9月27日付「信濃毎日新聞」)

## 矢澤米三郎

- 「日本アルプス研究」(雑報)「信濃山岳研究会の記」(會報)『山岳』第6年第3号(日本山岳會事務所、1911)  
「信濃山岳會と日本アルプス會成立」(會報)『山岳』第13年第3号(日本山岳會事務所、1919)  
山本茂実著「喜作新道 ― ある北アルプス哀史 ―」(朝日新聞、1971)  
日本山岳會信濃支部編『日本山岳會 信濃支部三十五年』(日本山岳會信濃支部、1984)  
近藤信行著「解題・解説」小島烏水著「小島烏水全集」第4巻(大修館書店、1980)  
山崎安治著「9 日本山岳會の設立」『新稿 日本登山史』(白水社、1986)  
信濃教育会「目でみる信州教育の100年」編集委員会編『目でみる信州教育の100年』(信濃教育会出版部、1987)  
上條武者「上高地1 神河内絵画き宿」(独木書房、1999=訂正版第1刷)  
菊地俊朗著「展望台 河野齡蔵と牧伊三郎」(2015年11月21日付「松本平タウン情報」)  
『平成30年度岐阜県博物館特別展図録「理科室からふるさとの自然を見つめて～知れば知るほど面白い標本の世界～」(岐阜県博物館、2018)

## 保科百助(五無齋)

- 一瀉千里著「奇人百種 第一等 保科五無齋」(1905年5月23日付「讀賣新聞」)  
横山健堂著「師範出身の異彩ある人物」(南光社、1933)  
原田準平著「明治以後の鉱物学」『地学雑誌』63巻3号(第693号)(東京地学協会、1954)  
宮沢憲衛著「信濃のはなし」(信濃民芸研究会、1963)  
佐久教育会編『五無齋保科百助全集』(信濃教育会出版部、1964)  
大町市史編纂委員会編『大町市史』第四巻 近代・現代(大町市、1985)  
矢羽勝幸著「浅間山の歴史 保科五無齋と浅間山」市川健夫監修『定本 浅間山』(郷土出版社、2005)  
金原正著「校長室の窓 第4号」(長野県蓼科高等学校、2013)  
岩上起美男著「シリーズ 一緒に考えましょう！ 五無齋・保科百助先生の「無垢なる教育的情熱」と「立科教育」」『広報たてしな 2013年8月』(立科町、2013)  
岩上起美男著「シリーズ 一緒に考えましょう！ 五無齋・保科百助先生の凄さの魅力」『広報たてしな 2013年9月』(立科町、2013)  
嶋崎さや香著「図書館設立過程と地域社会 ― 信濃図書館を例として ―」『京都大学大学院教育学研究科紀要 第62号』(京都大学大学院教育学研究科、2016)  
清水隆寿著「さんばく研究最前線 ― 北アルプスの自然と人 トピックス 2018.1 ～ 3 保科五無齋が残した「長野県地学標本」～大町西小学校に残された郷土の宝」市立大町山岳博物館編『山と博物館』第62巻第12号(市立大町山岳博物館、2017)

## 志村 寛(烏嶺)

- 志村烏嶺著「白馬岳第一回登山記」志村寛・前田次郎共著『やま』(橋南堂、1907)  
志村烏嶺著「日本山岳會創立前後の見聞」『山岳』第50年号(日本山岳會、1957)  
志村烏嶺著「近代登山草わきのころ」大町山岳博物館編『山と博物館』第3巻第5号(大町山岳博物館、1958)  
峯村隆著「長野時代の志村烏嶺」大町山岳博物館編『山と博物館』第31巻第1号(大町山岳博物館、1986)  
長沢武者「北アルプス白馬連峰 ― その歴史と民俗」(郷土出版社、1986)  
富山県「立山博物館」編『山を撮る 山へカメラを向けた人たち ①』(富山県「立山博物館」、1998)  
『別冊太陽 No.103 Autumn 1998 日本のこころ 人はなぜ山に登るのか 日本山岳人物誌』(平凡社、1998)  
東京都写真美術館企画・監修『山を愛する写真家たち 日本山岳写真の系譜』(日本写真企画、1999)  
市立大町山岳博物館編『よみがえる 高嶺の草花 ― 志村烏嶺 旧蔵植物標本 ― 近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物』(市立大町山岳博物館、2007)  
『人物伝 植物学者 牧野富太郎 なぜ、どう描いたのか』『Science Window 2013年春号(4-6月)』第7巻1号(科学技術振興機構、2013)

## 第4章 山の博物誌 ― 過去・現在・未来へ ―

- 《コラム》山小屋物語 ― 北ア最初の近代登山者向け営業小屋・白馬頂上小屋を開設した松沢貞逸 ―  
石沢清著「北アルプス白馬ものがたり」(信濃路、1973=3版)  
長沢武者「北アルプス白馬連峰 ― その歴史と民俗」(郷土出版社、1986)  
柳原修一著「北アルプス山小屋物語」(東京新聞出版局、1999=第4刷)  
菊地俊朗著「北アルプス この百年」(文藝春秋、2003)  
菊地俊朗著「白馬岳の百年 近代登山発祥の地と最初の山小屋」(山と溪谷社、2005)  
菊地俊朗著「槍ヶ岳とともに 穂荻家三代と山荘物語」(信濃毎日新聞社、2012)

# 謝 辞

企画展にあたり、下記の皆様方から、貴重な写真・資料や情報のご提供、関連催しのご支援など、多大なご協力やご教示を賜りました。

ここにご芳名を記して、心より深く感謝の意を表すとともに、厚くお礼申し上げます。

荒井和比古	傘木 靖	小谷宗司	西山 保
松沢貞一	宮畑周平	村田長年	百瀬 堯
公益社団法人信濃教育会	一般社団法人北安曇教育会	佐久教育会	
五無斎保科百助研究会	白馬村教育委員会	白馬村歴史民俗資料館	
長野県山岳総合センター	大町エネルギー博物館	大町市観光協会	
大町市立大町西小学校	大町市立美麻小中学校	大町市文化財センター	
大町山岳博物館友の会			

(順不同、敬称略)



渡邊 敏 没後90年  
令和2年度 市立大町山岳博物館 企画展

**博物学と登山** - 大正登山ブームと信州理科教育のさきがけ -

発行日 2020(令和2)年7月18日

編集・発行 市立大町山岳博物館

〒398-0002 長野県大町市大町8056-1  
TEL : 0261-22-0211 / FAX : 0261-21-2133  
E-mail : sanpaku@city.omachi.nagano.jp  
URL : <https://www.omachi-sanpaku.com>

印刷・製本 有限会社北辰印刷

〒398-0002 長野県大町市大町3871-1  
TEL : 0261-22-3030 / FAX : 0261-23-2010

